
陛下とメイド

真羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
陛下とメイド

【Nコード】
N9071M

【作者名】
真羅

【あらすじ】
美貌の陛下と健気なメイドの物語

陛下と私の関係（前書き）

登場人物

パリス♀ 22歳

美貌の陛下に使えるメイド。

陛下のワガママに振り回されっぱなしの苦勞人。

ジオール
陛下 27歳

良い歳こいてダッブーペンギンをこよなく愛する。

世界一の軍事力と貿易力を誇るウィークスピーク城の王。

ダッブーペンギン

お腹ぽっこりの愛らしいペンギン。

ダッブーは鳴き声だとかなんとか…

ルイス 22歳

パリスとは幼馴染。スノーピーク公国出身。

マギー侍女長

ジオールの乳母だった人

ローズ 21歳

シーランドラ国の姫

陛下と私の関係

水の都ウィークスピーク。

年間を通して蒸し暑い時期なので綺麗で有名な浜辺を求めて観光客で賑わう国。

その為、年中城下町は異国からの観光客が押し寄せて妙に活気づくのであった。

以前は世界一の貿易力と軍事力を併せ持つ強大な国であり隣国、はたまた世界から恐れられた国であった。

しかしそれも昔の話のこと。

今では軍事を撤廃する運動を第一線で掲げている観光産業豊かな平和国家だ。

「はあ〜」

城の窓から城下町を眺めて溜息を零す一人のメイド。

「本当だったら今頃ジェシカ達と城下町に行ってジェシカのお兄さんとデートしているところだったのに……」

パリスは窓を拭くために持っていた布に自然と力が入る。

一瞬ゴオオオと烈火の如く激しい炎がパリスの背後に見えた気がした。

「…パリス…ダップーペンギンが怯えているじゃないか」

いつの間にかパリスの背後に立っていたジオールは、腕にダップーペンギンを抱えながらワザとらしく声を震わした。

声をかけられたパリスは瞬時に振り返った。

「どこをどう見たら怯えているように見えるのよ!」

ジオールの腕の中で大好物の干し魚を頬張るダップーペンギンを見たパリスは、ビシッとダップーペンギンのお腹を指した。

「お腹一杯でもう食べれません。の図でしょ?!どう見ても」

「そう朝からカッ力するな」

「誰のせいだと思って言つてらっしゃるのかしらねえ〜!!」

反射的にジオールの服の襟を掴み揺らした。

…そう…今日は仕事^{メイド}が休みの日だったのよ。

それが…陛下の逆鱗に触れてしまった為に………こうして各部屋の窓拭きに徹しているのよ。

横目でチラリと見やるとジオールは先程私に掴みかかれた襟元を几帳面に正していた。

あれは、そう…数時間前に遡る。

一応陛下の専属メイドである私は、休暇届と外出届をジオールの所に持つて行ったの。

勿論ジェシカと城下町へ行くために。

私は、ジオールがいつもダッブーペンギンと一緒に居ると知っていたので執務室ではなく違う部屋へと向かった。

「ふーん…休みねえ。俺は働いて専属であるパリスは…」

年代物のアンティークの椅子にドカリと座っているジオールは膝の上にダッブーペンギンを乗せて優雅にティーカップを持ち運んでいた。

その優雅な動作に見惚れてしまい、ブンブンと顔を揺らした。

「規定では、週に2回休みを取らないとダメって書いてあるもの。

私の代わりなんていくらでもいるわ。休暇は堂々と取らせていただきます!」

「休むのは構わん。俺が言いたいのは外出だ」

「外出の何がダメなのよ。届を出したら良いんでしょ」

「パリス…この城に来て今まで外出などした事がないだろう」

「まあ…そうね」

何かと貴方に阻止されていましたからね。と毒づいた。

「だからこれから先も外出する必要はない。欲しい物があるなら俺

が揃えてやる」

「…本当に私が欲しいものを揃えてくれるの？」

「勿論だ。俺に不可能と言う文字はない」

得意気にフフンと鼻を鳴らす美貌の陛下は、私の答えを待っている。

「そう…それなら…恋人が欲しいわ！素敵な恋人が！」

パリスの口から出た言葉に、陛下は抱いていたダップーペンギンのお腹を思わず力一杯押してしまった。

「どうしたの？ジオール陛下。不可能と言う文字はないんでしょ？」

パリスはわざとらしく可愛く小首を傾げてみせた。

「ダップー…」

ダップーペンギンは驚きと苦しさでジオールの膝から飛び降りると奇声を発しながら部屋中を走り回った。

植木やら水差し…

高価な置物までひっくり返し部屋から出て行ってしまい残されたパリスとジオールは気まずい雰囲気になった。

「パリス此処にいたのね！搜したわ」

ジェシカがタイミングが良いのか悪いのか部屋に入ってきた。

「（げっ）…ジオール陛下…」

なんでこんなとこに陛下が？！と叫びそうになるのを抑えてジェシカは、パリスに視線を送った。その顔は誰が見ても引き攣らせているのがわかる。

「ジェ…ジェシカ！ごめんなさい遅くなって！今から行くからちょっと待ってね」

「ええ…あたしならいくらでも待つわ」

「そういう事だから陛下、私はこれにて失礼させていただきます！」
脱兎の如く、その場から逃げ出そうとした時だった。

グイツと腰を掴まれて後ろに引っ張られるパリス。

「なっ！危ないじゃないですか陛下」

「彼女の紹介がまだだろう？」

私の腰から腕を放すと、椅子の肘置きに片肘ついてパリスを見る。
「~~~~！はあ…彼女は中庭専属のメイドのジェシカよ！庭師の助手」

「ふむ。中々健康そうだな」

赤い髪に榛色の瞳。肌は綺麗に焼けた褐色。

ジェシカをマジマジと見つめる陛下。

「もう良いでしょ？私達急いでいるの」

「あつ！パリス、言うの忘れてたんだけど兄様達少し遅れるみたいなの」

ジェシカは、早馬の知らせをパリスに見せた。

「大変ね…馬車の後輪を岩に引つ掛けたなんて…大丈夫なの？」

「兄様だもの何とかやってると思うわ」

そのやりとりを黙って見ていた陛下が口を開いた。

「ジェシカとやら城下町に何をしに行く？色々、今後の参考にしたくてな」

「（今後の参考…！？）ジェシカ！答える必要なんてないからね」

「大した事じゃないんだし…」

「大した事じゃないなら言えるな？パリス」

につこりと微笑む美貌の陛下は、見る者全てを虜にしそうな極上の笑みをこぼした。

「……ジェシカのお兄さんとデートするの」

「……………」

沈黙が続き、おそろおそろ陛下を見た。

極上の微笑みが、絶対零度の微笑みに変わっていた。

額には何やら青筋の様なものが見受けられる。

「ハッ！大した事だ！！！！」

この時の陛下の怒鳴り声は城下町にまで届いたとか届かなかったとか。

「何故黙っていた？！」

ふてぶてしい態度で座っていた陛下は立ち上がると、ズカズカと

パリスの前にまで近寄って来た。

「何故黙っていたんだ!!」

「怒鳴らないで! ジェシカが怖がってる!」

パリスも思わぬジオールの怒りに焦りを隠し切れなかった。背中をひやりとした汗が伝う。

目の前に立ちほだかるジオールの胸板が荒い呼吸を繰り返し上下に動く。

パリスはジオールの顔を直視出来ずにドアの物影に潜む様に立つジェシカを見て言った。

「ジェシカ… 今回のデートの件は… 見送ってもらえない? 貴女のお兄さんには悪いけど…」

「えっ… ええ。わかった。城下町に行って伝えてくるわ」

そう告げるとジェシカは足早に、その場から立ち去った。

こうして私の初めてのデートは会う前に終わってしまった。

「俺のせいだとしても言うのか? そもそもパリスが俺に隠れてコソコソ密会するのが悪い」

ダップーペンギンの頭を撫でながら更に言う。

「悪い芽は早くに摘み取らねばならないからな」

パリスは方向を変えてジオールを睨みつけた。

「いつもそう。生誕祭や年に1回のダンスパーティーでも。陛下は私に男性を寄せ付けなかった」

「……」

「その癖、陛下は綺麗な女の人を回りに侍らせて… 私は、………」

……陛下の都合の良い玩具じゃない」

ぶいっと顔を横に逸して陛下の顔を見ない様にした。——が、

陛下の綺麗な指先が私の顎を掴み上に向かす。

陛下の顔が近付いて来て、反射的に目を固く瞑ってしまった。

しかし唇に触れる熱くて柔らかい感触に、パリスは目を見開いた。陛下の金色の髪と長い睫毛が近くにある。

「…っん……」

息継ぎをしたくて口を開いた瞬間に、するりと陛下の舌が入ってきた。

「んッ…!!」

ギュッと陛下の袖を掴む。

初めての深い口付けに戸惑い、力を振り絞って陛下の胸を押し返した。

口端からはだらしなく涎が滴りジオールは、それを親指で拭いさった。

「…パリス…聞いてくれ。認めたくないが俺はどうやらお前の事が好きで好きでたまらないしい。パリスが俺の側から居なくなる事が考えられない。俺の横は、お前じゃないと駄目なんだ。勿論ダッブーペンギンとは違う好きだからな!」

「…馬鹿!それを愛してるって言うのよ。いつになったら言ってくれるのかずっと待ってたのよ!」

パリスは、眉を潜めながらジオールを抱き締めた。

ジオールは、パリスを抱きかかえて室内にあるベットに下ろすと額から瞼。

瞼から頬。それから唇に口付けを落としていった。

「んっ…」

「どうした?」

「くすぐったい」

「じきに馴れるさ」

ジオールは慣れた手つきでメイド服の細かいボタンを外していく。徐々に姿を現すほてった体に己の興奮が高まっていくのがわかる。二つの豊かな丘を包む白いレースの下着に指を這わせ下着の上か

ら口に含んだ。

その瞬間、パリスの愛らしい唇から嬌声があがるのだった。

二人は官能の渦に引き込まれて夕方までダッブーペンギンの部屋から出て来なかった。

夕陽がカーテンの隙き間からもれてパリスは眉根を寄せた。

まどろみの中、逞しい腕に抱き締められている事に気付き少し照れるパリスは、ジオールの厚い胸板に頬を擦り寄せた。

「まだして欲しいのか？」

「……起きていたの?!」

頭上から甘い掠れた声がして反射的に顔をあげるとジオールと視線が絡み合い思わず目を逸した。

ジオールは自身の熱い欲望をパリスの腰に押し付けた。

パリスは、気恥ずかしさと違和感に思わずゴソゴソと動いてしまった。

「ああ……くそっ」

ジオールは、少しの動きでも敏感になり悪態をつきながらパリスの腰を掴みうつ伏せにさせた。

いきなりの激しい動きに驚いたパリスは、再びジオールにされるがままになった。

激しい運動だった為に、二人で眠りこけてしまったパリスとジオールだったが目が覚めた時には既に外は完全に暗くなっていた。

「……フッ……」

「むっ。何が面白いんです?ニヤニヤいやらしい」

再びパリスは顔を上げて弛みきったジオールの顔を指摘した。

「いや……やっと手に入れる事が出来たんだな。と思つてな。この時をずっと待っていたんだ……俺は」

「私もです、陛下。幼い頃にスノーピークで出会った、あの時から……あの場所ではルイスと私だけだったから」

一瞬ジオールはルイスの名前が出て顔を歪めたがパリスの額に口づけを落とした。

二人は思い出す…年中雪が降り積もる国、スノーピークを。
昔の…幼い頃の自分達を。

「私達…やっと恋人同士になれたのね？」

「俺は昔からお前の恋人だと思っていたがな」
そう囁いて二人は、また深い眠りについた。

陛下と私の関係：終

陛下と私の昔話

とある雨の日――

ウィークスピーク城内に響き渡る女性の声。

カツカツと廊下を歩く二つの足音。

「陛下！誤解です」

「誤解も六回もあるか！俺はアイツをぶっ殺してやる。ノコノコ俺の前に現れやがって……」

ちくしょう！と血走った目で怒鳴ったジオールの廊下を歩くスピードはゆるまらず。

とうとう目的の場所に辿り着いてしまった。

他の扉とは違い、頑丈な造りの両開きの扉をノックもせず勢いよく開け放つジオール。

部屋の中は広く剣を手入れする者、読書をしている者、体を鍛えている者と、他各々は一斉にジオールの方を見た。

「……陛下！？……」

驚きの声が部屋中に響き、皆が立ち上がり敬礼のポーズを取る。

どうやらこの部屋は、兵士の鍛練場兼休憩場なのだとパリスは思った。

「ああ。堅苦しくしなくて構わなん。公の行事でもあるまいし」

そう言いながら部屋を見渡す。

「今日新しく入って来たルイスは、ここには居ないのか？」

「はっ！ルイス准将は隣の鍛練場に……」

兵士が指さす方を見やると丁度ドアが開き汗だくの兵士が入って来た。

それから続けて涼しげな顔をした青年がやって来た。

「……ルイス……」

「あ？ああなんだジオール……陛下じゃないですか。久しいです

ねえ」

ニコニコと爽やかに微笑んでみせたルイスと呼ばれた青年。

「よくも俺のパリスに……」

いつから携えていたのか、ジオールは腰におさめていた剣を引き抜きルイスに向けた。

「パリスは、僕のパリスでもありませんから」

「ちよつと！陛下にルイスも！剣下ろしてください！」

ジオールの背後から二人に向かって言うが、聞く耳をもたず二人して外の鍛練場へと出て行ってしまった。

ドーム状の広場に出た二人。

雨の音がガラス張りの天井に落ちる。

「僕は、あの日からジオールに勝つ為だけに剣をふるってきたんです」

「ハッ！笑わせるな。あれから十年以上お前と手合わせはしていないが負ける気はしないな」

そう言っつてジオールは芝生の地面を蹴ってルイスに切り掛かっていった。

それを遠目から眺めるパリスは、片手で顔を覆った。

始まってしまった……

もう誰にも止められないだろう。

幼い頃も、二人は喧嘩をする度に木刀を振り回していたな。と思いき出した。

そう。あの時もこんな雨の日だった。

雪が混じって霰だったけどね。

十五年前。

スノーピーク公国。

ちょうどウィークスピークとシーランドラが戦争中で、幼かった陛下はスノーピーク公国を治めるガラルド公爵邸で匿ってもらっていたみたい。ちなみにガラルド公爵はルイスのお祖父様なの。

陛下と出会ったのが私が七歳だったかな。私とルイスは家がお隣同士の幼馴染みで…

ジオールが来るまでは、よく二人で遊んでたのよね。

「パリス待つて」

肩で揃えられた癖のない銀髪を風になびかせ走る少年。

初対面の人間なら少女だと間違えるだろう愛らしい顔をもっていた。

「わっ」

雪に隠れていた石に躓いたのか、スローモーションで目の前の少年は顔面から倒れた。

「ルイス！」

先に待っていた少女は、直ぐにルイスと呼ばれた少年の元に駆け寄った。

「病み上がりなんだから…無理しちゃ駄目よ」

「だって次の満月まで待てないんだもの。それに…」

「?…なあに？」

ルイスの視線がパリスの目から移動し、後ろの方を見つめた。

それに気付きルイスの視線の先を目で追うと、そこには見た事のない少年が立っていた。

「あの子は…？」

「わかんない。ルイスはここで待つて」

パリスより背の低いルイスは見上げながら、小首をかしげた。その姿が愛らしく、思わず抱き締めたくなったがパリスはグッと堪え

て、少年の所に向かって歩き出した。

向こうもパリスに向かって歩いて来る。先に声をかけたのはパリスで…

「何て言う名前？」

「…」

少年はチラリと横目でパリスを見るとルイスを見据えて、そのまま歩みを続ける。

「えっ?!名前くらい…」

言いなさいよ!と、言いかけて押黙る。

振り返ると、そこには少年に抱き締められているルイスの姿があったのだ。

「俺はジオール・ランバルディア・ウィークスピーク。人に名前を聞く時は先に自分から名乗るのが礼儀だろ?少年」

私と大して年の変わらない少年がハキハキと答える姿は何処かの貴族かと思うくらいで…

——ん?

ちよつと待つて。

今、このジオール何とかって名乗った少年…私の事、男の子と間違えてた!

頭の中で、ジオールが言葉がリピートする。

——自分から名乗るのが礼儀だろ?少年——

確かに…確かに…!!今の自分の恰好は、女の子だ!と胸を張って言えない。短く切り揃えられた髪。子供にしては平均より高めの身長。外で雪遊びをする為に、着せて貰った男の子用の貴族服…

「……何だ?押黙って…?まあ良い」

ジオールは、腕の中のルイスに視線を戻す。

「…くっ!何て、何て…可愛いんだ—————!」

「…え、っ」

パリスとルイスの声が重なった。

終いには頬擦りまでしそうな勢いのジオールに不信感を抱いたパリスは、猛ダッシュでルイスの所へ行き気を緩めているジオールからルイスを引っ張り出して走って逃げた。

「はあはあっ」

「パリス…大丈夫？」

「うっうん。私なら大丈夫。ルイスは？」

「僕も大丈夫。あの子が言った事、気にする必要ないよ。僕は知ってるから。パリスはどの女の子より女の子らしいって」

ルイス…：：：気付いていたんだ。私がさっきの少年に言われた言葉を気にしている。って。

「そ…：：：そうかな？」

少し照れて頬を染めたパリスは慌てて話を切り替えてみる。

「今日は、なんだか違う意味で疲れたね…：：：明日行こう？」

「うん…：：：でも大丈夫かなあ？」

「まだ時間がかかるってルイスのお祖父様が言っていたじゃない」

「うん…：：：じゃあ明日絶対行こうね！」

ルイスは笑顔でそう言い私達は、お互いの手を握って家路に就いた。

その頃、二人に逃げられてしまったジオールはポツンとその場に立っていた。

「ジオール王子！捜しましたぞ！」

「なんだよ、ガラルド公爵…：：：」

「…：：：屋敷の中は安全です。無闇やたらに外に出ないで頂きたい。ジオール王子の、お父上に頼まれているのだから『何か』があつては

困るのです」

「……そうだな。ウィークス・ピークは戦争中だもんな」

父上たちは頑張ってるんだ。俺も今自分が出来る事を頑張ろう。

「ただ家の中に一人で一日中居るのも退屈でしょう。明日、孫とその友人を連れて参ります。歳も近いので気にやむ事等ありませんぞ」
「……………」

ガラルド公爵と他愛のない会話をし滞在先の公爵邸へと向かった。別に俺は一人でも一行に構わなかったが、暇つぶしに遊んでやろうと思った。よくよく考えてみると、俺には歳の近い友人は居なかった。城に居た友人と呼ぶ者も、二十歳を超えていたし。さつきガラルド公爵に案内された客室の天蓋付きベットに潜ると目を瞑った。早く明日にならないだろうか。
楽しみで仕方がなかった。

早朝のことだった。パリスの家の呼鈴が鳴り響いた。

隣屋の扉が開いて階下に下りて行く足音がパリスの耳に入った。

何やら騒がしい。

パリスは完全に覚醒してしまい何事かと部屋から出て、その先に向かった。

「ガラルド公爵…本当ですか？」

パリスの両親が玄関に立ち、ガラルド公爵と話をしているところだった。

パリスが来ていることに気付いた大人達は、一斉に注視してきた。
「パリス！ウィークス・ピーク城の王子様が非公式で此处に滞在しているんですって」

「こらこら、今公爵があまり騒がないでって言ったところだろう？」
「いやーん。と騒ぎ立てる母を、父はいつもの様に抱き締めて鎮める。」

パリスは少し冷めた目で両親を見てガラルド公爵を見た。

「ルイスのお祖父様…それで何ですか？」

「うむ。パリスには、まだ理解しがたいかもしれんが今、王子の国では戦争中だな。王子の安全をと戦争が終わるまで非公式で私の屋敷で滞在しているのだよ」

「ふーん…」

それで何故私の家に来ているのだろうか？私は嫌な気がしてならなかった。

「滞在期間中、王子の遊び相手になってやってくれんか？」

「まあ！ガラルド公爵！頭を上げて下さい！！」

頭を垂れたガラルドを見て両親は、あたふたと戸惑いを見せた。

両親はカツ！と目を見開いて行きなさい。と目で訴えてくる。確かにここで断れば、頭をさげたルイスのお祖父様に失礼だし、両親の『メンツ』とやらが丸潰れだ…

「ルイスのお祖父様…喜んでお受けします」

そんなこんなで私は今、自室で侍女達に髪を梳いてもらい母はドレスを選んでいた。

「せっかくウィークスピークの王子様が来られてるんですもの！着飾らなくちゃね」

鼻歌混じりに一着抱えて座る私の目の前に出した。

「これなんてどう？」

「……嫌だって言っても聞いてくださらないんでしょう？お母様…」
「可愛くなーい」

母はそう言っで私の顔を両手で挟み込んだ。

「もっと年相応な返事が出来ないのかしら？私の育て方が悪かったのかしら？」

「…十分年相応だと思うのですが？」

って言うか、お母様が精神年齢低過ぎるのでは？パリスは心の中で突っ込んでみた。お父様の苦勞が見て取れるわ…

「奥様、セットが終わりましたわ」

「可愛く仕上げてくれたのね。有難う」

長い髪とは違い短い髪の為、セットのバリエーションが少ない。しかし、ワックスを付ける事によりボリュームがアップしパーマをあてた感じになった。

「はい。じゃコレ着ましようね」

「…（ぐっ…）」

目の前に出された華やかなドレスを見て、顔をひきつらせた。

ゴンゴン

屋敷の扉に付く獅子の形をしたノックを叩く。いつ来てもルイスの家は大きなあ后感心しながらパリスは反応のない豪邸を再度見上げた。そんな時、バタバタと可愛い足音が近づいて来た。

「パリス！！！」

「ルイス…どうしたの？慌てて…」

駆け寄って来たルイスは、パリスの背後で息を切らせて隠れた。

「俺を騙すとは良い根性だな！」

「（げっ…）！！」

仁王立ちする少年は、ギロリとパリスの後ろに居るルイスを睨んだ。

「ちょっと！ルイスが騙したって、どう言う事？」

横からパリスが入った事でやっと視線をルイスからパリスへと移った。

「……」

目を見開き、指をさす少年――

もといウィークスピーク城のジオール王子は、入口のホールからツカツカ出て来ると、ヒシリとパリスに抱きついた。

「なっ……何するのよ……!!」

右アッパーを繰り出したパリスは、反射的に殴ってしまった。

当のジオールは大きく弧を描きながら後方に、ぶっ倒れた。

スローモーションで倒れていくジオール。それを偶然目撃したガラルド公爵は、螺旋階段を勢いよく駆け下りジオールに近づいた。

「王子!!大丈夫ですか?!」

返事をしないジオールに、パリスの背中に嫌な汗が流れ落ちた。顔面からも血の気が引いていくのがわかる。

まさかクリーンヒットするとは思わなかった。意識が戻らなかったら……王子を殴ってしまったのだ。あのウィークスピーク城の!

世界一の軍事力と貿易力を兼ね備えた……

ガラルド公爵はジオールを抱きかかえて、一言パリスに向かって言った。

「女子たるもの、もう少しお淑やかに振る舞うべきだぞ」と、叱った。

再び螺旋階段を上って行ったガラルド公爵の後を追うように侍女達が駆けて行った。

その様子を見届けてパリスはルイスを見た。

「ジオール王子の部屋に案内してもらえるかな?」

「うっ……うん」

大理石の螺旋階段を上り、広くて長い廊下を歩く。

前を歩くルイスは銀の髪を靡かせて、クルリと振り返った。

「パリス……気にしなくて良いよ。お祖父様、そんなに怒ってる風じゃなかったから」

「でも、失望させてしまった……」

「……」

沈黙が続き、ルイスが一つの扉の前で立ち止まった。

「ここだよパリス」

「ありがとう」

深呼吸をして、それから扉を叩いた。

「ジオール王子！目を覚ましましたか！！」

軽く身を起こしたジオールは、自分の顎をさすった。

「……痛い」

「申し訳ございません！私の不注意で王子を……」

ジオールは、ゆっくり手を上げてガラルドの声を遮った。

「……あの少女は？」

「パリスの事ですな！」

「パリス……そうか」

ジオールは苦笑した。

その時、部屋の扉を叩く音が響いた。

「ルイスのお祖父様」

ノックの後、震えた声が続いた。

「パリスです」

「……入りなさい」

静かな低い声が室内から聞こえた。

パリスとルイスは、ゆっくりと扉を開けて広い部屋に入った。

「ジオール……王子……ごめんなさい」

パリスは、ジオールの傍まで近づいて頭を垂れた。

それを凝視しているジオールは、ニッコリ微笑みかけた。

こんな素敵な笑顔も出来るのだと、パリスは頬赤らめた。

「嫌だね。そんな単純な言葉で、俺の心の傷は癒されない」

「なっ！」

思わず声をあげ、ジオールを見た。

「俺が良いと言うまでお前は俺の玩具だ」

「なっ！なんですって〜！！」

掴みかかろうとする私をガラルド公爵は、落ち着きなさい。と宥める。

「この俺の傍に居れるんだ。嬉しく思え」

その時は、ジオールの気まぐれだからその日一日だけ王子の遊びに付き合えば満足してくれるだろうと思っていた。

しかし、私の考えは非常に甘かった。あれから十二年経った今でもジオール陛下の玩具（下僕）が続いているとはつゆ知らず、ジオールの相手をしていた。

「まさかあの少年がパリスで銀髪の少女が……ハア……」

「何よ！その溜め息。明らかにルイスが女の子だったら良かったな」。って言ってるみたいじゃない」

「わかってるじゃないかパリス」

パリスの肩に手を回して抱き寄せた。そう、今私はジオールの滞在先であるガラルド公爵邸の客間のソファに座っているのだけど何故か、へばりついてくるジオール王子。ルイスはニコニコと向かい側のソファに座っている。

「近いわよ！！」

肩に回された手をパシッと叩いた。

「あつまうこんな時間。ルイス、今日があの日なんだけど……」

「あつ！最終日なんだよね……」

「今夜迎えに行くわ！ちゃんといつもの所に来てよね」

「うん！わかった」

じゃあね。と軽く手を振った――

その時――

ギョツとドレスの裾を引っ張られた。

「えっ？」

「俺がわからない話をして欲しくない。説明しろ」

出た……ワガママ王子め！

「ルイス！説明する必要ないからね」

私はそれだけ言い、その場から脱兎の如く逃げ出した。

捕まったら絶対口が滑って言うてしまう。なんだかんだでジョー
ルは一人前にカッコイイ部類だ。

綺麗な顔に弱い私はたちまち言うてしまいそうだ。

今夜は珍しく雪が降らなかった。

静まった屋敷を抜け出して、ルイスとの待ち合わせ場所へと早足
で向う。

そこには相変わらず可愛いルイスと、腕を組んで傍らに立つ

「ジョール王子！」

「声が大きいぞパリス」

「ごめんなさい、パリス！パリスが帰った後ジョール王子に脅され
て…」

「フン！脅すとは人聞きの悪い…割と友好的に話し合った。俺の中
での」

「（割とって…）とにかくジョール王子は屋敷に戻って下さい危険
です」

チラッと、ジョールは腰から斜めにぶら下がっている物を見せた。

「危険なのはお前たちだろう？雪が降っていなくても今は夜だ。子
供だけの行動は危険過ぎる」

あなたも子供じゃない。とパリスはばやいた時、視界にキラリと
光る何かが入った。

「それって…」

ルイスもマジマジと見た。

「剣だわ！！」

「まあ俺がいるから安心しな」

「その自信どこから来るのかしら？良いわよ！今日あなたを殴って

しまったお詫びに私たちの秘密の場所へ連れて行ってあげる」

パリスが先頭に立ち真ん中にルイス、一番後ろはジオールがついた。かれこれ三十分程歩いている。体力のないルイスの足取りは、覚束ない。雪に足を取られるので体力の消耗が早いのだ。

「大丈夫？ルイス…」

パリスは、心配気にルイスの前にしゃがみ込み様子をうかがった。

「ん。大丈夫だよパリス」

「海岸線が見えてきたから、もう直ぐだからね」

「うん」

「ここまでして一体何があるんだ？」

腕を組むジオールは、小首を傾げ後ろから二人の姿を見つめた。

その質問に二人は顔を見合わせて微笑んだ。

「目的地に着いてからのお楽しみだよ」

ルイスが楽しそうに答えた。

ジオールは、その返答に何を言うわけでもなく頷いた。

それから更に道なりに歩みを進めて行った。

「ふう〜やつと着いたね」

「うん」

「で？この小高い丘に何があるんだ？」

「静かに！…見て…あれ」

この小高い丘は、冬の海岸が見渡せる。白銀の砂浜は蒼い月に照らされて幻想的にかがやいてみえる。

その白銀の砂浜が所々盛り上がり始めた。

「なっ…何が起きてるんだ？」

慌てるジオールを横目にパリスは、にっこり微笑み異国の王子に説明する。

「国鳥…ダッブーペンギンの孵化の時期なの」

「ダブブーペンギン？何だ？そのふざけた名前は…」

「蒼い満月の時にしか孵化しない珍しいペンギンなの」

全身の体毛は、陽の光と角度によって色が変わる。

その珍しい毛皮は闇市で密売され高額で取引されている。

「最近密輸とかで絶滅危惧種に指定されたんだよね？パリス」

「うん、密猟だね」

「ふん。成る程。そのナントカペンギンの孵化を見に、わざわざ寒
い中、時間と労力を使い危険を冒してまで来たと言うわけか」

「そんな言い方ヤメテ」

「パリス…」

ルイスは、パリスの背後に回って服をギュツと握った。

「くだらない」

——バチンッ

ジオールが、そう呟いた瞬間、パリスはジオールの頬をひっぱたいた。

思いがけないパリスの平手打ちに驚いたジオールは、よろめき雪の地面に尻餅を着いた。

「生命の神秘を素直に感動せずにひねくれた考えしか出来ないアナタなんて最低よ」

パリスはルイスの手を取ると、丘を下り始めた。

「ルイス…もつと近くで見ましよう」

「えっ。うつうん」

二人は、小高い丘から海岸に向かってゆっくりと歩き出した。

「……また殴られたのか？」

未だにジンジンする頬をジオールは撫でた。

「見てルイス…ダッブーペンギン目がまだ開いてないわ」

「でもみんな海に向かってるね」

「きつと潮の匂いで本能がそうさせるのね」

白銀の砂浜から這い出た生まれたばかりのダッブーペンギンは、一斉に海へと向かう。

「……！ルイス岩影に隠れて！」

小声で呟いたパリスにルイスは素直に従う。

「ルイス、密猟よ！あのダッブーペンギン達、助けなきゃ」

「えっ？！」

岩影からそつと海岸を見る。

二つの人影が網を持って、未だ目の開いていないダッブーペンギン達を捕まえているのだった。

「ルイスはこの事を屋敷に戻って伝えて！」

「でも…パリスが」

「私のことなら心配いらないよ」

「う…うん」

そう言つてルイスは、駆け足で丘を登った。

途中、丘でジオールが座り込んでいて、ルイスは放っておこうかと思つたが一応この中の年長者なのでパリスの助けをして欲しいと伝えて、その場から離れた。聞いているのかいないのか定かではなかったが、とにかく大人を探しに戻ったのだ。

残つたパリスは、勢いよく岩影から飛び出すと大声で叫んだ。

「このダッブーペンギン泥棒……！」

二つの黒い人影は、一瞬ビクリと反応を見せた。

「（とにかく時間稼ぎを…）あなた達ダッブーペンギンの密猟は違法なのよ！」

人影は互いに顔を見合わせ、網を放った。月の光が逆光で性別が

解りにくい。

ガタイが良いので男かもしれない。その人影がゆっくりこちらに向かつて歩みを進めた。

それに比例するかの様に、パリスは一步後ずさる。とうとう先程身を忍ばせていた岩が背中についた。

「威勢のイイお嬢ちゃんじゃねえか」

下卑た笑いを口元に含ませ、近づいてきた。

「よく見るとなかなかの上玉じゃないか？」

グイツとパリスの顎を掴んだ。

パリスは、もうそんな近くまで来ていたのだと思い、身が竦んだ。現に、膝はガクガクと震えて今にもしゃがみ込みそうだ。

「奴隷市場で売れば高値がつく…ダッブーペンギンよりな」

「嫌あああつ」

パリスの腕を掴み、一気に男の肩に担がれた。バタバタと手足をバタつかせるが、大の大人に適う筈もなく、首を一尽きされ気絶した。

「おい。ジョルゾ！引き上げる…ぐはあつつ?!」

白銀の砂浜にバタリと崩れ落ちる男。その肩から力なく落ちかけるパリスをジョールは抱き締めた。男二人は、完全に伸びていた。

丁度その時、足元の雪がゾワゾワ動き、慌ててその場から一步後方へ下がった。

地面から這い出て来たダッブーペンギン。

蒼い月に照らされて、光る体は以前宝石凶鑑で見たブラックオパールのように輝いていた。

「…なんて綺麗なんだ」

正直な感想だった。

生きた宝石とはこの事だと思った。

声に反応したダッブーペンギンは、慌ててその場をクルクル回った。

そして、ジョールの足にぶつかって気を失った。

「……まずいな」

周りを見渡すと気絶したヤツらしか居ない。
ルイスが大人達を連れて来るまで待つことにした。

「ジオール王子！ご無事で何よりです」

ガラルド公爵は、ジオールが抱いているパリスを受け取り、怪我がないかを確認した。

「ダッブーペンギンの密猟者だ。気絶しているだけだ」

ルイスが殺人者でも見るような目で見てきたのでジオールは鼻で笑いながら言った。

「そうですか。ジオール王子お手柄ですぞ！」

興奮気味のガラルド公爵だった。

密猟者は、治安維持隊に気絶したまま連行されて半分網にかかったままのダッブーペンギン達は海へと戻って行った。

ところが、先程ジオールの足にぶつかって気絶していたダッブーペンギンだけは海に向かおうとしなかった。

翌日――

街中が、ジオール達のお手柄に賑わっていた頃ガラルド公爵邸では……

「懐かれたみたいね」

そう言ったのはパリスで、相変わらず自分の隣を占領するジオールを見ながら言った。

「鳥は生まれて初めて見たものを親だと思っらしいからな」

「やけに詳しいわね」

「パリス…ジオール王子って見かけによらず可愛いものが大好きみたいだよ」

「ルイス…余計な事は喋るな」

「意外に可愛い所もあるのね？ところで本当にジオール王子って剣を扱えるのね！私も気絶さえしなければ見れたのに…」

「パリス！僕も見てないよ？」

「やっぱり剣を扱える人って粗野で乱暴者でも、きっと一瞬だけ力ツコ良く見えるよね！」

「パリス…それは嫌味か？」

「誰もジオール王子だなんて言っていないじゃない」

そんな二人のやり取りを見ていたルイスは、少し考えている風だった。

ある日、中庭で寝ていたジオールの所にルイスがやって来た。

「ジオール王子…」

「ん？」

片目だけでルイスの表情を伺った。

腹の上では、愛くるしいダッブーペンギンが腹這いになって寝ていた。

「なんだ？ルイス」

「僕に…その…剣を教えてほしいんだ…」

もじもじ話すルイスに苛立ちを覚えながらも、ダッブーペンギンを撫でる手はとまらない。

「…無理だ」

「少しでもいいから！基本だけでも…」

「剣を覚えて、何をするんだ？この前、パリスが言っていた事を気にして剣を扱える様になりたいってか？」

「違う！」

「生半可な気持ちじゃ無理だ」

「違う違う！僕は、パリスを守りたいんだ」

「…パリスは俺が守るから必要ない」

「うつ…うわああーん」

「げっ…」

ルイスは、泣きながらポカポカとジオールを数発殴ると中庭から出て行った。

その後パリスが鬼の形相でやって来て、ジオールに説教していった。

「何だっと言うんだ？」

再び目を瞑りダップーペンギンを撫でた。

そして、とうとうルイスが行動を起こした。

「ええっー？！本当なのルイス？！」

「うん。お祖父様にも許可をもらったから…」

いつも寛いでいる客室でルイスは活き活きと言った。

「いつ戻ってくるの？」

「えっと…」

「五年だ」

「「えっ？」」

今まで静かに聞いていたジオールが口を開いた。

「俺も寄宿学校に居た」

「そうなんだあ」

「だからパリス！僕頑張ってくるからね」

「…帰って来たら手合わせしてやるよ」

ツンとした素っ気ない態度だった思いやりに溢れていることは二人にはわかっていた。

そうしてルイスは、三日後に寄宿学校へと旅立った。

あれから年月が経ちウィークスピークとシーランドラの長い戦争も終戦を迎え、講和条約が締結された。

それは、ルイスが寄宿学校へ行ってから五年後の事だった。

戦争が終わったと言うことは、ジオールはウィークスピークへ帰らなければならない。

私はルイスが居ない状態でジオール王子に、お別れの挨拶を言う為に滞在先のガラルド公爵邸へ向かった。

「ガラルド公爵、長い間世話になった」

「此処へ来た時は、どうなるかとヒヤヒヤしたものだ」

「スノーピークにはウィークスピークにない美味しい食べ物が沢山あった。父上に貿易の範囲を広める様に頼んでみる」

客間に立つ二人の姿を見つけパリスはゆっくりお辞儀をして入った。

「おお！パリスカ」

ガラルド公爵が先に気づき、それから背中を向けていたジオール王子が振り返った。

脇にダッブーペンギンを抱えている。

「パリス、話がある」

真剣な眼差しでジオールは言い、客間の入口に立ち竦むパリスへと近づいて来た。

「話…？」

「…私は席を外した方がよろしいかな？」

「いえ。ガラルド公爵も聞いて下さい。パリスのご両親が今、海外に旅行中なので公爵の許しを頂こうかと」

「ふむ…」

ジオールはパリスの手を取ると、ガラルド公爵の前へ連れて行く。

「パリスをウィークスピークへ連れて行きたい」

「…ええっ?!」

「パリスはダッブーペンギンの事に関して詳しい知識を持っている。異国の地へダッブーペンギンを連れて行く訳だ…。もしもの事があったら…俺は…俺は…!」

脇に抱えている一回り大きくなったダッブーペンギンを撫でたく

る王子を横目に、パリスは頭を抱えた。

まさか、ダップーペンギンの為にウィークスピークへと召される
とは思ってもいなかった。

結局、私はウィークスピークへと行く事に決めた。

ジオールの居ない毎日なんて考えられない自分が居たからだ。

なんだかんだで彼に興味があつたし、少なからず好意も抱いてい
た。

「衣類等の荷物は向こうで揃えさせる」

「必要最低限の物しか持つなって事？」

「そう言う事だ」

パリスは一度家に戻り自室で持つて行く為の小物等を用意してい
た。コツつと背後で足音がした。

「勝手に入らないで下さい」

振り返らなくても誰だかわかる。ノックもせずに入ってくるのは
ルイスとジオールだけ。

「ルイスは入っていたじゃないか」

「ルイスは特別なの」

「……ふーん」

納得いつてないのか、ジオールは不満げに应えてパリスの部屋か
ら出て行った。トランクに詰め込みが終わってパリスは、自室を眺
めた。

それから

「行つてきます」

先にホールへと降り立ったジオールは、階段をおりてくるパリス
を見上げた。

「時間、間に合いますか？」

「ウィークスピークの豪華客船だ。俺に合わせる」

ジオールはパリスの手に持たれたトランクケースを預かると外に
控えている従者へと渡した。

「行こうか」

今まで見たことのない位の笑顔でジオールはパリスの腕を掴んだ。その笑顔にパリスはドキリと心臓が早鐘を打った。

照れながらコツクリと頷き、促されるまま港へ向かった。

その日は珍しくみぞれ霰が降っていた。

雪に雨が混じって、パリスはあまり好きではなかった。

ちょうど港に着いた時、ウィークスピークの船が入って来たところだった。

「何だ？」

「やけに親子連れが多いみたい」

「まあ。俺には関係ないがな」

ぽけっと入って来た船を見ていたらジオールが引つ張った。

「霰が酷い」

「うん……」

着くまでに衣服はビショビショだ。

雪ならそんな事ないのに。

その時――

「パリスから離れろ！！」

上空から聞こえて、ハツと声の方へと見る。

「下がってるパリス」

腰に携えている剣を取り出し、構えたジオール。

それから直ぐに剣と剣が交わる音が響いた。

「ジオール王子…手合わせ。覚えていますか？」

剣を持ち二人の前に立ちはだかったのは、あのルイスだった。

「ルイス?!」

「パリス…ただいま」

駆け寄ろうとするパリスの肩を掴み、後方へと押して前に出たジオール。

「手合わせはどうした？」

バランスを崩したパリスは後方で雪の中で崩れ落ちた。

「パリスに乱暴するな！」

剣を構え、ジオールに斬りかかってきた。

刃と刃がぶつかり合い火花を散らす。

「遅くなつたじゃないか、ルイス」

「ジオール王子と剣を交える日を楽しみにしていました」

ジオールは、ニヤリと微笑んでルイスの剣を薙払う。

両者共、後方に飛び下がり剣を構え直す。

「よく言う…」

「パリスを連れて行くのですね？」

ルイスは地面を蹴り上げ、剣を平行に寝かせて下から振り上げた。
ガチャンと響き渡り、ジオールは衝撃を軽く受けとめる。

「それが……………どうした!!」

ルイスの剣を弾き飛ばした。

クルクルと回転し、ルイスの後ろの地面へ突き刺さった。

「ルイス……………剣を抜いたなら、真剣に向かって来い」

「……………」

「時間が惜しい。さよならだ…ルイス」

剣をしまい溜め息混じりに、そう呟いた。

「ルイス……………」

パリスは衣服に着いた囊を払いながら、立ち上がり駆け寄った。

「大丈夫？」

「…うん…パリスの方こそ」

「うん。私は大丈夫！ちよつと小旅行するの。すぐ帰ってくるから」

「僕もついて行く」

「駄目だよ。ルイスのお祖父様、ルイスが帰って来たら家督の勉強をさせるって息巻いてた」

「でも……………」

「ルイス、パリスを困らせるな！落ち着いたら、ルイスもウィークスピークに来いよ」

あの日の記憶が互いの脳内に走馬灯のように駆け巡った。

ギリギリっ――

「あの言葉通り、家督も継いで准将にもなってパリスを迎えに来た」

「そうか――だが、遅かったな。パリスはもう俺のモノだ」

「くっ……！」

ギリギリカチカチと両者の剣が鳴る。

その時、ふとルイスが剣の力を抜いた。

「何？」

力を抜いたのに気を取られ、ジオールは一緒ルイスが消えた様に見えたがくると回転し、ルイスはジオールに背中を向けてしゃがみ込みジオールの顎を蹴り上げ、怯んだ隙に脇腹目掛けて剣を叩きつけた。

「ぐっ……」

「「陛下……?!」」

周囲がざわめく。

「心配は要らない。峰打ちだから」

ジオールは薄れゆく意識の中、ルイスの言葉を聞いて瞼を閉じた。

次に目が醒めた時、真っ先に視界へと飛び込んできたのはベッドの端でもたれかかっている影だった。

枕元のランプを手探りで付けて正体を知った。

「……パリス」

パリスは寝ている様で、静かな寝室に寝息が聞こえる。

そう――

俺はルイスに負けたんだ。

まさかあんな捨て身をしてくるなんてな。彼奴も必死なんだろう。少し余裕を見せてしまった。

パリスを母国に連れて行かれたと思ったが……

そつと彼女の薔薇色の頬を撫でた。ふつくらと弾力のある頬。そしてみずみずしい唇。

寝間着なのだろうか、露出の高い服装に自分の心臓がドキリと打つのがわかった。

パリスは……此処に存在している。

安堵感に包まれたのは言うまでもない。

そう――事の発端は、昼前の執務室で会議中、何気なく外を見やると中庭にパリスが居たのだ。

一人ではなさそうで、もう一人居たが同僚のジェシカではない事はわかる。

パリスの目線が高い位置に留まっているからだ。

そしてあの笑顔。

頬を朱に染めて照れる、その姿は明らかに異性に対するもの。話が終わったのか、どこの国でも一般的な親愛の印、頬へのキスに俺は苛立ちを覚えてしまった。パリスに触れて欲しくない。

俺以外の男に――。

会議が終わり早速パリス呼びつけ問い詰めると、嬉しそうにルイスの話をする。ルイスがやって来たと。

家督を継ぎ、且つこの国の准将位まで上りつめた。

彼奴なら大尉……いやもつと上にまで来るだろう。

それにしても、あんな大勢の手前で醜態を晒してしまったな。剣のクラスはルイスよりずっと上の筈。

「はあ……」

思わず大きな溜め息が出てしまった。

「……」

ジョールは前屈みになり、眠るパリスの頬へキスを落とした。

翌日、自室にルイスが来た。

「挨拶が遅れましたこと、申し訳ございません」

毛先の長い赤い絨毯の上で膝き頭を垂れる青年。

「良い。昔の馴染みだ。畏まらないでくれ」

「そうですか――。では本題に移らせてもらいますよ?」

「パリスの件なら断る君主命令だ」

「職権濫用ですか?」

「ルイスとはパリスの話はしたくない」

「ワガママな国王陛下ですねえ。パリスの苦勞が手に見て取れる」
立ち上がったルイスはにつこり微笑み礼をし、部屋から出ようとした。

「何故家督を継ぎ、この国の准将にまでなつて此処に居る?」

「それを、アナタが聞きますか?理由なんて、一つしかないでしょう?」

パリスを――。

ルイスは悲しげに微笑み、扉を閉めた。

陛下と私の昔話　：終

陛下と私の喧嘩

最近イライラする。それもこれも……

チラリと横に並ぶ青年を見る。

ニコニコと部下やメイド達に手を振る——ルイス。

女性陣からは黄色い声が……

城下の見回りを終えて帰って来たのに疲れ知らずなのか笑顔を絶やさない。

最近、物騒なことに城下町で人攫いが頻繁に起こっているのだ。その見回りにルイスとその部下を連れて人攫いに牽制の意味も込めて出向いたのだ。

「お帰りなさい」

ダッブーペンギンを抱えてやって来たパリス。

薄手の寝間着で部屋から来たのだろう。体の線がハッキリとわかる。物分かりの良い部下達は極力パリスを見ずに、互いに挨拶を交わして自室へと帰って行った。

……俺は、そのパリスの行動にさえイライラしてしまう。

「こんな遅くまで起きていたのか？」

「えっ？ええ……この子が落ち着かなくて」

腕の中でもがき始めたダッブーペンギンを床に下ろすとテクテクと覚束ない足取りでジョールの足にしがみついた。

「そのダッブーペンギンってもしかして」

部下とは違いまだ残っていたルイスが目を細めてダッブーペンギンを見る。

「あの密猟事件の！」

すかさずパリスが口を挟む。

「ああ……やっぱりそうでしたか」

「大きくなっ」ルイス、明日も早い。早く部屋に戻れ」

厳しい口調で会話を断ち切ったジオールは、足にしがみついているダッブーペンギンを抱き上げるとぼっこりお腹に顔をうずめ、自室へ向かって歩いて行ってしまった。

「何だかご機嫌ナナメのようだね」

「…うん…」

何故だか解らなくて心の中がモヤモヤする。

「っへ…つくしゅん」

「この国の昼間は暑いけど、夜は少し肌寒い…」

ルイスはそう言っただけで自身が身に付けていた上着を脱いでパリスに被せた。

「ありがとうルイス」

素直に礼を述べたが、ルイスは眉間に皺を寄せてジロジロとパリスを舐め射るように見た。

「忠告だけど…そんな格好で部屋から出るのは感心しないよ」

「えっ？」

「そんな薄着で城内をうろつくのは感心しないよ？」

「うゝん…」

ジェシカだって他の先輩メイドだって、休みの普段着はこんな感じの服なんだけど。

「いいかいパリス？」

念を押して言うてくるルイスに負けて頷いた。

「じゃあ部屋まで送ってくよ」

「お願いしますルイス准将」

ルイスは困ったように眉をしかめて頭を掻くと手を出した。昔、パリスがルイスにしたのと同じように。

今は、逆の立場になってしまったが懐かしさにパリスは照れながらもその手を取った。

そのやりとりをダッブーペンギンを抱えたジオールが目撃してい

ただ。

苛々でダッブーペンギンの部屋から連れ出して来てしまったので戻そうと思って帰って来ていたのだが再び踵を返して私室へと早足で向かった。

「わざわざありがとう」

「気にしないでいい……にしても本当に此处で間違っていないよね？」

見上げた豪華な扉。明らかに一介のメイドが住む部屋ではない。

まさか……

「ジオールに会って来ようかなって」

「ああ……そう」

やっぱりジオールの私室だったみたいだ。

「それじゃ僕は此处で」

ルイスは、そう言って手をヒラヒラ振って元来た廊下へと戻って行った。

ルイスの姿が見えなくなっただけから、パリスは深呼吸をして扉をノックした。

静かな廊下に響く重い音。返事がない。

「疲れて眠っちゃった。……とか？」

ゆっくり重たい扉を開けて部屋に足を踏み入れた。

夜のせいもあるが部屋は真っ暗で手探りでランプを探す。

「痛っ」

足を棚の角にぶつけてしまい、そしてグイッと腰を捕まれた。

「きゃあああっ!？」

「静かにしろ」

「!陛下!？」

「ああ…そうだ」

私の腰に手をあてがったまま奥の部屋に連れて行かれる。

ぼふんつとベッドに押し倒されて、腹這いになってしまった。ジオールは、素早く枕元のランプに明かりを灯すとうつ伏せ状態のパリスにのしかかった。

「コレは…必要ない」

ルイスに借りた上着を忌々し気に剥ぎ取ると遠くに放り投げてしまった。

「やだ!シワになってしまう」

「構わん。ルイスのだ」

「だから余計に…んっ!！」

項に舌を這わす。パリスの両手はジオールによってベッドに押さえつけられて身動きがとれない。

「陛下っ!私はこん…んっ…っ」

背中の紐を解かれてスルリと衣服が脱げた。ギュッとシーツを掴む。暴れないとわかったジオールは、押さえていた手を放して脇腹から手を差し入れて膨らみに触れた。ビクンと跳ねる白い裸体に抑えが利かず、ベルトを素早く外してパリスの腰を少し持ち上げた。未だ濡れていないそこに己の欲望を上下に擦りつけた。

「ダメっ…んっ…」

抵抗の言葉も虚しく、ジオールは固く閉じられたそこにねじ込んだ。

「んあっ!！」

初めての時と違う圧迫感と引き裂くような痛みに、パリスの目か

ら涙が零れ落ちた。

「…あっああっ…」

ズンズンと奥に腰を打ちつけられ、獣のような格好で求められて恥ずかしくなる。

耳を塞ぎなくなる淫猥な音色に益々興奮し、激しく腰を動かすジオール。

自ずとパリスの嬌声も大きくなっていく。

「何度言ったらわかる…つく…ジオールだ」

抱えていた腰を放して、挿入したまま器用にパリスを回転させると仰向けにした。

片手でパリスの胸を揉みしだき、桃色に色づく頂を押す。

その間、パリスは手で声が漏れないように塞ぎ、嫌々と顔を左右に振る。しかしジオールが止める筈もなく、ラストスパートを始めた。パリスの両足を抱えて自分の膝に乗せて深く腰を動かす。

重力のままにジオールにもたれると熱い猛りが奥深くまで突き刺さる。

「んあっあああっ…——！」

とうとう達してしまい、痙攣した体はジオールの上で締め付けて跳ねる。

「クッ……—」

その圧迫にジオールもグツと腰を押し付けてパリスの奥に絞り出した。

少し余韻に浸りながらも、ズルりと白濁液の付いた己を取り出した。

「んんっ…ジオール…」

上気した頬、半開きの潤んだ唇。

ジオールはパリスの唇に自分のそれを重ねて貪った。

結局、情事は朝方まで続き途中で意識を失ったパリスは昼前に目覚めた。

「んっ…」

朝日とは違い強い日差しが降り注ぎ、覚醒した。しかし
瞼が重くて、なかなか開く事ができない。腰に回されている手が重
くて熱い。それに何より、関節の節々が痛い。

「…起きているかパリス」

項に、唇を付けながら話しかけてくるジオール。熱い息が触れる。
「怒っているか？」

「昨日の陛下は大っ嫌い。私の意思、まるっきり無視して」

「そうは言うがパリスはパリスで、あんなによがっていたじゃない
か！」

その言葉に、パリスはジオールの方に向き直り、手近にあったク
ッションを投げつけた。

「っ！！」

「最低！」

パリスは、そう言って散らばった衣類を集め適当に身仕度して、
そそくさと部屋から出て行った。その後ろ姿を見ていたジオールは、
慌てて後を追った。

パリスは、怒り心頭で出て行ったが身に付けているのは薄手のキ
ヤミソールとメイド用のスカート。あんな姿でウロウロされては困
る。部屋の扉を勢いよく開け放ち、左右を見渡しパリスの後ろ姿を
探す。チラリと見えた、曲がり角からスカートの裾を見つけて、追
った。

「パリス、すまな…」

ガシツと掴んだ手は、パリスではなくジェシカだった。

「きゃっ！びびびっくりした。って陛下！？」

「ああ…すまない」

掴んでいた手をパツと放して、ジオールはキョロキョロ辺りを見
渡す。

「パリスを見なかったか？」

「陛下…パリスは…その…あの」

顔を赤らめて、俯きながら話すジェシカに苛立ちを覚えた。

「君は、人と話をするときは目を見て話すって教えて貰わなかったのか？」

そう言つと、ますます顔が赤くなり

そして…

「ジオール陛下！何やってるんです？まゝたメイド口説いてるんですか」

呆れた口調でジオールに声を投げかけた人物。

「…まっ…マギー侍女長」

「そんな上半身裸で話かけられたら、ジェシカも困惑するさいな！」

恰幅のいい体で、両手を腰に当て言いやった。

「上半身裸…？」

まじまじと、自身を見下ろすと、ラフなスラックスに上半身裸の状態である。

「パリスなら自室だね。きつと。でもその前にキチンとした身なりをして行きなさい」

ビシッとジオールに指差して言い放ったマギー。ジオールの乳母であったこの人には、何故だかジオールは頭があがらない。

「わかった。マギー…ありがとう。ジェシカもすまないね」

力なく微笑んだジオールは、最初よりも猫背になりながらトボトボと自室へと向かつて行つた。

「結局、パリスを捕まえられなかったな」

あんな格好で自室まで帰つてたとしたら…あの流れるような曲線美。柔らかな胸の膨らみ。白い素肌。城の者に見られている可能性がある。そう思うとゾツとする。それでなくても、パリスに少なからず好意を寄せている人間は居るわけだ。そいつらを煽るようなもの。

そこまで考えて、ジオールは余計に落ち込んだ。

部屋に着いたジオールは上着を羽織り、再びパリスの自室へと向かった。

勢いよくジオールの部屋から出てきたパリスだが、壁に手をあてながら自分の部屋へと向かっていた。それぐらいいないと、腰が痛くて崩れ落ちてしまうのだ。しかし何故か道行く人の視線が痛々しい。

何でだろ？

「あっ！……！」

上着を羽織ってない！思わず両手で体を隠して、その場にしゃがみこんだ。

「うう……こんな姿で歩いてたなんて恥ずかしい……！」

柱の影に隠れようとした時、腕を捕まれてマントの様な物にくるまれた。

「うあっ？！」

「何て格好をしているんだいパリス！」

頭上から声がかかり、相手の胸にもたれながら見上げると。

「ルイス！」

「こんな所をジオールに見られたら大変だよ……！」

ルイスは、くるんだパリスの体を人目につかないように、自室へと連れて行った。

パリスの部屋は、メイド寮で、城の一棟を越えなければならなくまだまだ遠いからだ。

「上に何か着るものが必要だね」

ルイスの自室に入って、彼の言われる通り適当に腰掛けているとクローゼットから上着を持って来てくれた。

「ありがとうルイス。それからごめんなさい」

「えっ？気にしないでいいよ」

「違うの。昨日借りた上着……その……」

「ん。… 本気にしていないから」

そして、ソファに座るパリスの視線に合わせて中腰になった。

「それよりも、パリス。僕は、直ぐに傷心が癒える人間じゃない。

昨日の夜、君とジオールの間で何があったかなんてパリスの口から聞きたくない」

少し苦々しく、それでもいつもの微笑みで言った。

「っ…！ごっごめんなさい」

「僕は、パリスを困らせてばかりだね…」

そう言っ て俯くパリスの頬を軽く撫でた。

「パリス！居ないのか？！居るなら返事をしろ！」

ジオールは、ドンドンと扉を叩いていた手を止めて一歩後ろに下がった。

そして、右足を腰の高さまで上げクルリと反転し…

「すーっぷ」

「むっ！」

「なァーに回し蹴りして扉こじ開けようとしているの！」

再び現れたマギーに、嫌でもうなだれる。

「奇遇だなマギー侍女長」

「奇遇だなんて！ずっとつけてましたのよ？陛下が、要らぬ騒動を起こしそうでしたのでっ… 今頃、お気づきだなんて… 騎士の風上にもおけませんね」

「騎士じゃないから…」

こめかみを押さえながら、手のひらをマギーに見せた。

「何でございましょう」

可愛らしく小首を傾げてみせておどける。

「もう勘弁してくれ…」

「ええわかりましたわ。で、パリスでしょう？」

マギーの口からパリスの名前が出てジオールは一瞬怯んだ。

「ああ。… っ て居場所を知っているのか？」

「勿論ですわ。だってメイド寮に来る前に、見かけましてよ」

その言葉に、うなだれていた頭がバツと持ち上がった。

「本当か?!」

「ええ。確か、ルイス准将とご一緒だったと思いますわ」

ルイスの名前が、出た瞬間。

ジオールの顔が強張った。

ドタドタと鳴り響く足音。徐々に近づくそれは、ルイスの部屋を目指して一直線に向かって来るのがわかる。パリスの頬に触れていたルイスの手が宙に浮いたまま固まる。

バンっ。と扉が外れてしまふくらいの勢いで開いた。

「…パリス」

その声は、いつもの余裕ぶっているジオールのものではないくらいの声音。

「…陛下? って、わわっ!」

至近距離に居るルイスから咄嗟に飛び退いた。

「あのっ…上着を借りていたところなの。ただのそれだけだから」
そう無理に振る舞うパリスを見て、余計にルイスを腹立たしく思う。

「…」

眉間に皺を刻み、無言でパリスの手首を掴んで自分の腕の中に抱き込んだ。そして、びくりと震えたパリスの肩に被せられたルイスの上着を脱がして、代わりに自身のを着せた。

「…帰るぞ。話がある」

なおも、冷たい声のままなジオールにパリスは戸惑いを隠せない。

「んっ…。うん。またねルイス…有難う」

「気にしなくていいよ」

軽くひらひら手を振り、ジオールに連れて行かれるパリスの後ろ姿に聞こえるか聞こえない程度の声で謝った。

「…そこに座りたまえ」

このジオールの自室まで来る間、一言も会話せずにやって来た。何度か、ジオールに話しかけようとしたパリスだが、見えない雰囲気、に圧倒され毎回言葉に詰まってしまふ。

やっと、口を開いたかと思ったら至極不機嫌のそれ。パリスは、あえてジオールの正面に座らずに斜め前に腰を下ろした。

「…パリスは…成り行きで俺の恋人役をしているのか？」

膝の上で、祈るように手を組み口元をそれで隠すジオール。

「…はあ…？」

成り行き…？

恋人役？

「なっ……どうしたらそんな考えが出てくるんです?!」

「だってそうだろう？君はルイスが城に来てからというものずっとアイツに夢中じゃないか」

「変なん言い掛かりは、やめて。どうしたの？陛下…」

不安気に見つめ返してくるパリスに、ジオールは頭を左右に振った。

「愛してるんだ。」

だから不安になる…ルイスに惹かれていくパリスを…俺は…俺だけが一方通行なんじゃないかって」

金髪にくしゃりと指を差し込んで、神経質そうに掻いた。

「それにあの時（前話）は、ルイスがパリスにキスをして、頭に血が上っていたが…何の話をしていたんだ」

今、思えば不思議な光景だ。

照れて頬を染め優しく微笑むパリス。仲睦まじい様子。

そして、頬へのキス。

「そんなに、信用ならないの？ ころころ目移りする女だっと思ってる？ 私はただ、久しぶりに再会した幼なじみに喜んでいただけ。確かに、あの庭でのキスは…」

そこまで言うのと、口をつぐんでしまった。

「？ 何だパリス」

気になり急かすが、ジオールの背後にある扉に視線を置いたまま。
「ジオール…パリスを苛めないでほしい。今から僕が説明するよ」
ゆったりとした口調で、そう告げたルイスはパリスの横に座った。
対峙する二人。

「率直に言う。あの庭で僕はパリスに結婚を申し込んだ」

その余裕な笑みを零すルイスを見て、ジオールの片眉がピクリと跳ねた。

「でも、パリスの答えはNOだった。愛している人が居るって。相手の名前なんて聞くまでもなくわかっていたよ」

ルイスは、それだけ言うのと立ち上がった。

「どうやらパリスは陛下に惚れているみたいだ」

ポンポンと、ジオールの肩を軽く叩きながら囁いた。そして少し強めにジオールの肩を掴んで言った。今度は、パリスにも聞こえるように。

「…あの時…スノーピークにジオールさえ来なければ、僕達の世界は二人だけで進んでいただろうに…」

悲しげに微笑み手を、そっと離れた。

パタンと、静かに扉は閉められ再び二人きりの空間に戻った。

顔を赤らめて俯く陛下に、私まで照れてしまう。

「…陛下…ううん。ジオール…私には、貴方しか要らない」

あの後、何日か経ってルイスがスノーピークに帰った事を知った。

陛下と私の喧嘩：終

陛下と私の嫉妬

親愛なるパリスへ

今、この手紙はスノーピークへ帰る船の中で書いています。

手紙が届く頃、そちらは大変な事態になっているのでは？と思うと、やはりパリスを無理にでも連れて帰るべきだったと、後悔しています。これだけは言わせて欲しい。決して僕が仕組んだ訳ではない。今回の帰館は、家督の事情で戻ります。収拾付き次第、准将の仕事をこなしていくことをジオールに伝えて欲しい。

用件だけで申し訳ない。

P S . 彼女には十分に気をつけて下さい。きっと二人の愛があれば問題ないでしょうが。

簡素な用紙に走り書きされたルイスからパリスに宛てた手紙。伝書鳩ならぬ伝書隼が運んで来てくれた。それを自室のソファに寝転びながら読んでいた。

「大変な事態には、まだ起こってないわね…それに彼女って？」

相変わらず、言葉を濁すの好きだなあ。苦笑しながら、手紙を折り畳みルイスの手紙に書かれてあった通りジオールに伝えに行こうと扉を開けた。

するとバタバタと慌ただしく走り回る同僚達の姿が飛び込んできた。

今日は、非番なので適当にぶらぶらして一日を過ごすつもりでいたパリスも初めてみる光景に思わず一人のメイドを呼び止めた。

「アンナ、今日どうかしたの？やけに騒がしいけど」

「ああパリス！今日は貴女が羨ましいわ」

緑の瞳が印象的なアンナが、困惑しきった表情でパリスに縋った。
「どういうこと？」

「シーランドラ国のお姫様が滞在されるのよー！」

「シーランドラって…確か…」

「ええ。無謀にもウィークスピークに戦争をふっかけて来た国よ」

メイド寮の窓から城の中心を走る回廊と中庭が見える。

アンナが、チヨイチヨイと窓の外を指す。

「えっ？」

首を傾げながらアンナに促されるままに覗き込んだ。

城の謁見へと続く中央回廊。

そこを歩く緩く巻いた金髪。

傍らには、シーランドラの兵士らしき人達で固められていた。

「今から陛下に挨拶だつてさ！で・それが終わる前に客室の準備を整えないとダメってわけ」

そう言うわけだから！と、手を振り回してアンナは元気よく立ち去って行った。

「…金の髪…」

ジオールと同じ…

何となしげに、自分の髪に触れて一房掴む。

「…コンプレックスじゃないけど…」

金髪とも言えぬ、くすんだ金。

茶髪が混じっている為に、そう見えるのだろうがパリスは、このパツとしない髪の色が好きではなかった。

遠目で、謁見室に入って行く姿を見て溜め息をこぼした。

重くずっしりした扉を、シーランドラ国の姫を囲んで歩いていた中の一人の兵士が開けた。

赤くて毛先の長い絨毯が真っ直ぐに伸び、一段高い場所で寛いで座る男の前まで続いていた。

胸を張って、一歩ずつ足を踏み出したシーランドラ国の姫。

緩く巻いた金色の髪が、ハラリと肩からこぼれ落ちてなびく。

胸元まで広く挟れたデザインの艶やかなドレスを見に纏っているが、彼女の幼げで愛らしい顔立ちの為に、いやらしさが微塵もない。

男——…ジオールは、玉座から立ち上がり近くまで来たレフガルディア国の姫と対峙した。

それから優雅に腰を折り、頭を垂れたまま微動だにしなくなった。

「面を上げよ」

凜としたジオールの声が響き、女性は顔をゆっくりと上げた。

金の湾曲した長い睫毛が数回まばたきし、緑の瞳を覗かせた。

息を呑む程の美しさに周囲の人達は、ざわついた。

「シーランドラ国第一王女ローズにございます。」

形のいい唇が、えくぼを作りキュッと微笑んだ。

「今回、突然の訪問に陛下ならびにウィークスピーク、城内の方々に多大な混乱を招いてしまい申し訳ございません」

胸の前で両手を組んで、お祈りするようにして謝罪の言葉を並べた。

「何でも観光大使として来てくれたと…」

「…はい。あの戦争終結時に結ばれた友好条約、ウィークスピーク国とシーランドラ国の間で今、発揮すべきだと思い参りました」

「私もローズ姫の力になれるように微力ながらも滞在期間中、尽くしたいと思う」

そう言い互いに握手を交わしたのだ。

「ふうー突然過ぎるだろ」

溜め息を吐きながら、正装した服を解いていくジオールを横目に
パリスは、ダッブーペンギンの柔らかいお腹を指でつついたり撫でたりしていた。

「遠目から見ただけど、どんなお姫様だったの？」

「ん？可愛い感じの子だった」

固められていた髪をクシャクシャと搔いて乱しながら、そう言う
ジオールにパリスは、「ふーん」とだけ言って再びダッブーペンギンを相手に遊び始めた。

しかし、何を思いついたのか腹這いになっていた身を起こしてジオールに尋ねた。

「…それで…そのローズ…姫？は、いつまで滞在するの？」

「さあ？」

水差しに手を伸ばしていたジオールは、それだけ言うと水をグラスに注ぎ飲み始めた。

「さあって…」

何だか冷めた対応に、パリスはどう接したら良いのか困惑していた。

まさか…

あのお姫様が美し過ぎて、見るに堪えない…とか？
さつきから視線すら合わせてくれない。

…でもそう思われても無理はない。よね？

部屋着だし、化粧もしていない。

ジオールの好みは、きつとああいう子なんだ。

何より、彼の口から「可愛い」と言う単語が発せられたのだ。今まで聞いたことのない他人を褒める言葉に、ショックを受けた。自惚れていたのかもしれない。

ジオールは、私の事を大事に思ってくれていると。

長い付き合いだけど、私…ジオールの事、何も知らないや。

ふと、そんな事を真剣に考えているとパリスの目の前に暗い影が遮った。

言うまでもなく、それはジオールのもの。

ソファに座るパリスの前に少し中腰になりながら、指摘した。

「難しい顔をしているな」

人差し指を突き出して、パリスの眉間にあてがった。

「なっ！何を…」

するの？！と言いかけて遮られる。

「眉間に皺が寄っている。パリスに悩みか？珍しい」

そのジオールの何気ない言葉に、腹立たしくなる。

ジオールには能天気に見えているかもしれないけれど。

私にだって悩みの一つや二つある。

「私にだって考え事や悩み事ぐらい、ある」

振り絞って出した声は、震えていなかっただろうか。

そう言った後、パリスは膝の上に乗っかっているダッブーペンギンを横に置いて立ち上がった。

「どうしたんだパリス」

少し呆れたように、溜め息をこぼしながら呟いたジオールを無視して、なるべく彼から遠ざかるように扉を目指した。

案の定、扉のノブを掴む一歩手前でパリスの細い手首を掴み、ジオールの腕の中に拘束された。

パリスの背中にジオールの早鐘を打つ心音が伝わってきて、同時にパリスの髪に熱い唇が口づけられた。

「すまないパリス。何か気に障る様な事を言ったか？」

腕の中のパリスは、首を縦にも横にも振らない。

「パリス…答えてくれ」

哀願してくるジオールに、パリスは口を開いた。

「ジオールは別に気に障るような事、言ってないから」

につこり微笑んでみせると、不安そうにしていたジオールの表情は一変してパリスの体を更に力強く抱き締めた。

チュツと音を立てて、パリスの項うなじに自分の痕跡を残した。

それを満足げに眺めて、緩めた片方の手で上から撫でた。

敏感に、身を跳ねさせたパリスに対してニヤリと妖しい笑みを零した。

「寢室に行こう」

ジオールは、切羽詰まった声音でまくし立ててパリスを抱き上げると、隣室にあるベッドルームの扉を足で開けて入っていた。

わかっている。

これは、ローズ姫への嫉妬だと言つことに。
でも素直に言えない自分がいた。

可愛い感じの子

そして彼と対等に並ぶことができる王族。

五等爵位の男爵家である私なんて普通なら話すことすら許されない身分なのに。

優しく言うジオールが、その遠くを見る彼の表情にいくら言葉で好きだと。愛しているだと言われても…

信じていいのだろうか。

「うつ……ん…」

肌寒さを覚えて目が醒めた。

辺りは真っ暗で、パリス手探りで横に居るであろうジオールを探した。

広いベッドだが、手の感触は随分前から冷えた状態のシーツだけ。
こんな事、今までになかった。

情事後は、必ず一緒に朝まで共にしていた。

それなのに今、横にはジオールの姿はなく、シートまでもが完全に冷え切っていた。

つまり、随分前から居ないと言うこと。パリスは唇をキュツと噛み締めた。

この部屋には、居てられない。

パリスは、逃げるようにしてジオールの私室から出て行った。

「素敵な晩餐会ですわ」

昼間のドレスとは違って、黒を基調とするワンピース型のドレスを身に纏った姿で大広間に現れたローズは、目の前にズラリと並べられている食材に表情を明るくさせた。

「気に入って頂けた様で…。今回は、ローズ姫にウィークスピーク城内の者達と話す機会を作る為に立食形式の晩餐会にさせて貰った」
ローズの横に並んだジオールは、昼間と同様に正装した姿でローズを接待していた。

「まあ！そうでしたの。陛下のお心遣いに感謝しなくてはいけませんわ！」

お互いに持っていたワインの入ったグラスの端を当てて、高々と掲げた。

「「両国民に平和と繁栄を！」」

二人は声を揃えて言った。

それを合図に、大広間に居る国の関係者達も盛り上がった。

パリスは自室に戻ってベッドの上にボフィンと倒れ込んだ。

何故だかジオールと、あのローズ姫と二人が一緒に居る映像がよぎり、フルフルと頭を振る。

「どうかしてる…」

そう呟いた時だった。

部屋の中に誰かが入って来たのがわかった。

「ジオール…？」

「ここに居たのねーパリス」

バアンと勢いよく部屋の扉を開け放ち、仁王立ちする恰幅の良い女性。

「まっ…マギー侍女長！」

「探しましてよーパリス！」

ニヤリと、怪しげに口角をクイツと上げて微笑んだ。

「アンナが疲労で倒れてしまったのよ。だから晩餐会の給仕係をパリスに入ってもらいたいのー」

「アンナが！？昼間は元気だったのに…」

それに晩餐会。

きっとシーランドからの使者達の…

普段なら、そう言う細かい事でもジオールは逐一教えてくれていたのに。

「パリスは、今日非番でしょ？」

マギー侍女長は、どこからともなくバサリと給仕服を見せた。

白い前掛けに、首回りが四角に挟れた黒色のフリルが付いたワンピース。

これが…！みんなが言う、一度は着てみたい給仕服…！

確かにデザインは可愛らしい。

「さあ〜ベッドから起き上がりなさいな。支度は、このマギーが整えてあげるわ」

強引にマギーは、パリスの腕を掴んでベッドから引き剥がした。後は、テキパキと素早い動作でパリスに給仕服を着させて髪を結い、軽く化粧を施して準備を整えた。

「まあ！もうこんな時間ね！そろそろメインに替える時間だわ！ほら行きますよパリス」

懐中時計を取り出したマギーは、目を見開いて言う「パリスの手を掴み調理場へと向かった。

「まず、そうですね！…船の運航が良いかもしれません」

「それは、同意見だ。ウィークスピークにはない食物の輸入…活気づくでしょう」

前菜に舌鼓を打ちながら、ジオールとローズは話に華を咲かせていた。

「…メインディッシュをお持ちしました」

大広間に響く料理長を先頭に給仕係り達が、大皿を手に持ち続く。その中に、パリスが混じっているとは知らずにジオールはローズとの会話を楽しんでいる。

長いテーブルに持って来たパリスは、重い大皿を落とさないように置いてトングを持ち、皿に盛っていく。

「これ、貰っていい？」

頭に降って来た、ずっしりと重い男らしい声に、パッと顔を上げた。

「えっ…ええ、どうぞ」

金髪に緑の瞳。

金の髪は、長くて肩の近くでリボンで緩く結わえていた。そのギャップに、自然と頬が緩んだ。

「えっ？何か変な事、言った？」

「いえ…失礼しました」

気に障ったのだと思って、パリスはぺこりと頭を下げて謝罪した。

「やめてくれよ！責めてるんじゃないから」

につこりと微笑んでみせる男性に好印象を受けたパリスは、彼の持つ皿に少し盛った。

「ありがとう。ここの料理長は最高だね。是非ともシーランドラに来てもらいたいよ。…あっ…あと君にもね」

キザったらしくウインクを投げた男性だが嫌味っぽくもなく、爽やかだった。

「なっ！何を…」

仰ってるんですか！？と言う前に、可憐な声が響いた。

「お兄さま！居らしていたのね」

緩く巻いた金髪を靡かせながら走ってきた女性。

金の髪に緑の瞳。

「ローズ！少し遅れてしまったが、君の大使姿を見に来たよ」

「陛下、紹介致しますわ。兄のラクティスです」

ローズの後を、追って来た高身長 of 男性。

他の誰よりも、華やかな風格を放っているジオールが、現れた。

パリスは、咄嗟に俯き加減になりながら給仕を再開した。

「今回は妹のローズが、お世話になっています。これを期に両国が
良い方向に流れる事を期待していますよ」

ラクティスは、にこやかに言うと言握手の為に手を差し出した。

「ああ。こちらこそ」

遅れて、ジオールも手を差し出して堅く握手を交わした。

「ジオール陛下？」

しかし、握手をする前から様子のおかしいジオールに、ラクティ
スは声をかけたのだ。

依然ある場所を見つめているからだ。

そう…ラクティスの背後に。

メインディッシュを皿に盛る給仕係り。

ラクティスも視線の先を辿ると、先程まで会話していた女性に向
いている事がわかった。

「ああ。ジオール陛下は、まだでした？」

ラクティスは、気を利かせてパリスの元に行った。

数歩、足を伸ばせば着く。

「また頂くね。ちょっと大盛にしてもらえる？」

「…」

パリスに耳打ちするように顔を寄せて来た彼——…ラクティ
スに、ピクリと反応してしまい後ずさった。

その拍子に持っていたトングが手から離れて、大理石の上に音を
立てて滑った。

「ごめん。大丈夫?!」

「いえ」

喉の奥から振り絞って出した声は思ったより通り、ジオールの耳に届いた。

まさか。と思って見ていた女性が、まさか本当にパリスだったと知って、ジオールは反射的にパリスの肩を抱くラクティスに掴みかかった。

「わっ!ジオール陛下?!」

周りの食器と共に盛大に、大理石の上に尻餅を着いたラクティスは、驚愕の目でジオールと、その逞しい腕の中に閉じ込められている女性を見つめた。

「お兄さま!大丈夫ですよ?」

「あつ…ああ」

ポンポンと、下半身を叩きながらラクティスは起き上がった。

「陛下!あんまりですわ。兄が何をしたと言うのです?」

「申し訳ないラクティス王子。まさか彼女が、こんな所で給仕係りをしているとは思わなくて」

腕の中で、もかくパリスを余所にジオールは続けた。

「彼女、パリスは私の婚約者でね…。悪い虫が付かないように気をつけていたのだが…」

「まさか、俺を悪い虫だと?ご冗談を!」

そう言うラクティスだが、緑の瞳は挑戦的だった。

パリスは、婚約者だの悪い虫だの頭上で展開される会話についていけずに混乱していた。

「そう言う事だ。非礼は詫びる。すまなかった」

「いや…ジオール陛下の婚約者様だとは…馴れ馴れしく接してしまつて…失礼したね」

ぽりぽりと頬を搔いて、ラクティスは妹のローズを連れて賑わう大広間の中央へ行った。

事務的な言葉を並べて謝罪したジオールは、腕の中で静かに収まるパリスへ声をかけた。

「こんな所で何をしている？」

あまり聞かない冷ややかな声音で、ジオールはパリスを問い詰めた。

苦しそうに身をよじり、ジオールの腕の中から出て向き合う形で彼の顔を見上げた。

「本当は、今日非番なんだけど体調崩したメイドの代わりで給仕しているの」

ジオールの前でクルリとスカートを翻して回って見せた。

「この給仕の制服、着るのが夢だったんだよね」

身をひねって、スカートの裾を摘む。

白いレースのペチコートが見えた。

「…やめなさい。」

バサツと、ジオールはパリスのスカートを摘む手を叩いた。

「!？」

「さつきも、あの二人に言ったが…パリスは俺の婚約者だ。節度ある行動をしてもらわないと困る」

「それ！婚約者。いつから陛下の婚約者になったの？聞いてない」

あの二人を欺く為だけに言った言葉なんでしょう？

婚約者だなんて思ってもいないこと言っ

ジオール陛下の瞳に映っているのは、先ほどからローズと言う名の美姫じゃない。

「ジオールだろ？ベッドでは、いつも甘い声で呼んでくれるのにな」

「ヤメテ下さい」

パリスは耳を塞ぎながら声を荒げた。

「からかわないで下さい。迷惑です。今、現在も」

ぶいと、ジオールから顔を逸らして床に落ちたトングを探した。

「パリス、待つんだ。順序が間違ってしまったが…」

手を伸ばして、パリスの肩を掴もうとしたが、軽くかわされて虚しく空を切った。

「パリス！何を怒ってる？！」

パリスに声を掛けて追ったが、たちまちジオールの周囲に貴族の令嬢達が集まり始めてやむを得ず、諦めた。

「先ほどの女性は陛下の愛妾でして？」

「珍しく毛質の違う女性とお戯れとは……」

「私達は……いつ陛下からお呼びがあるのか待っていていましたよ？」

貴族の令嬢は、煌びやかなドレスに身を着飾り、自分が一番だとアピールする。げんなりしながらも、ジオールは丁寧に受け答えに応じた。

視線の先には、人の波にのまれていき、小さくなっていくパリスを見つめ続けた。

貴族の令嬢から解放された時にはホールでは、既にお開きムードが漂っていた。

「陛下。先程の女性……パリス……でしたかしら？彼女はどちらに？」
につこり微笑みながら、グイツとジオールに顔を寄せて問い詰めた。

「……人の波に吞まれてしまつて……」

「見失つてしまったのですか？……彼女、本当に陛下の婚約者でして？」

腕を組み、綺麗な指先をひらひらさせた。

そのローズの言葉に、ジオールのポーカーフェイスが歪んだ。

「私、此処に来る前に彼とお会いしましたの……ルイスに」

その名前に、更に顔色を変えた。

パリスの幼なじみ。

そして、恋敵。

パリスは、俺を好いてくれている。

俺もパリスを愛している。

ルイスもパリスに振られたが、俺以上に彼女を大切に想い愛している事は、パリスを見つめる苦しい表情でわかる。

「ルイス…」

「ええ。聞けば彼女…ルイスの婚約者なんですってね」

「…はッ！くだらない冗談だ」

ブンブンとジオールは、かぶりを振った。

パリスは、そんな事言っていないし、そもそもそんな話自体聞いた事などない。

ルイスは、結婚を申し込んだがパリスに断られている。

「一度、パリスにルイスは結婚を申し込んだ。しかし、パリスの気持ちはルイスにはなかった」

「そっ…そんな！ルイスが断られるだなんて」

ローズは、みるみるうちに青ざめてホールの床にへたり込んでしまった。

とっさに体が反応したジオールは、腕を伸ばしてローズを抱き留めた。

遠くでそれを目撃した兄のラクティスは、大臣との会話をそこそこに終わらせて走って来た。

「ジオール陛下！」

「話の途中で気絶してしまった…このまま部屋に連れ行く」

「…話の途中…？」

「…ああ…込み入った話だ」

「まさか、ローズの前でルイス殿の話？」

「その通りだが」

「はあ」

こうべを垂れて、大きく深い溜め息を零した。

「此処では難ですので、ローズの客間に向かいましょう」

「今日は非番なのに駆り出してすまなかったねパリス！」

ホールの奥、厨房の片隅でマギー侍女長は、良く動き働いたパリスを労った。

「いえ。この給仕服を着る事が出来たのでそれだけで満足です」

祈るように、両手を組んでパリスはマギー侍女を見つめた。

「そう、良い経験が出来たね。今日はもうゆっくり休みな」

「はい。お疲れ様でした」

腰を折って礼をしたパリスは、棒な足を奮い起こして自室へ向かった。

寮に戻ると、廊下で黄色い声が広がった。

「あっ！お疲れパリス」

「ねっ！アレ見てよ」

「やっぱり婚約の話は本当だったのね」

騒ぐ同僚を横目に、促されて窓際に近寄った。

昼間に見た中央回廊。

初めてここでレフガルディア国の美姫、ローズ姫を目撃したのだ。ゆっくり顔を覗かすと、其処にはジオールの腕に抱えられている

ローズの姿があった。

回廊の柱と柱の間から見えては隠れる見覚えある姿。

向かう先は、謁見の間の奥…

ローズ姫の滞在している客室。

パリスは、思わず身を引いて後ずさった。

「美男美女でお似合いね」

「それにお二人共、金色の髪で余計映えるものね」

何気ない同僚の言葉にグサリと胸に突き刺さった。

「あれパリス、顔色悪いよ？気分が優れない？」

「パリス、今日非番なのに頑張ってたもんね」

「あつ…はは…疲れてるのかもね」

力なく微笑んでみせて、自室の扉に手をかけた。

パタンと静かな部屋に虚しく響いた音を背中に感じて簡素なベッドに、身を投げた。

ジオールのベッドとは違いスプリングは効いていなければ、上掛けは薄い。

あの部屋が、当たり前になっていた自分に情けなく思ってくる。

愛していると、好きだと言ってくれているが、それはきっと一時的なものに違いない。

彼には彼に合った家柄が、お似合いなのだと言え今更気がついてしまった。

なのに何故、あんな所で婚約者だなんて。

幸いにも、シーランドラ国の二人にしか聞こえていなかったみたいだけど。

でも、ジオールとローズ姫は婚約しているとメイド達は口々に言っていた。

何がどうなっているのか全くわからなかった。

パリスは悩みに悩んだ末、いつの間にか眠りについた。

「んっ…」

ゆっくりとジオールが、カウチにローズを横たえたと潤う唇から吐息が混じり、うつすらと瞳を開けた。

「へっ…陛下っ?!」

目の前に、片足についてローズを見つめる美しい男性にうろたえた。

「気絶したんだよローズ姫」

ひょっこりジオールの肩口から顔を見せた兄、ラクティスを見て強張った顔が僅かに緩んだ。

「…ええ…ルイスの話を聞いて…」

「ルイスと知り合いなのか？」

どうやら、知り合い以上な気がしてならないジオールは、未だに虚ろな瞳をするローズを問いただした。

「ルイスとは、戦争中に隠れていたマールニア諸島で出会ったのです」

「その時、俺もマールニア諸島に居たんだ」

ローズの向かい側のカウチに腰を落としたラクティスは、にっこり言った。

「寄宿学校があるな…」

俺も、戦争が始まる前に此処で剣術や戦術を学んだ。

ジオールは、話を促す為にローズを見つめたが、口を開きかけては押し黙るを数回繰り返したので、流石の彼も少し苛立った。

それを感じ取ったのか、変わりにラクティスが口を開いた。

「恥ずかしながらローズは、ルイス殿に結婚を申し込んだのです」

この世界での王侯貴族は、女性から男性に結婚を申し込む事を、はしたないものと考えられている。

それなのに一国の姫である、ローズはルイスに猛烈なアタックを繰り返していた。

「それまでに俺もルイス殿とは剣術での戦闘訓練で組になった事もあって、話す機会が増えたんです」

いつもラクティスにくつついて寄宿学校の片隅で剣術を見ていたローズは、よく兄と組になるルイスと顔を合わす機会が増えて会話をするようにになっていき、ルイスの優しさや時折見せる温かさに触れて徐々に好意を寄せていった。

「まあ…結果は、惨敗ですがね」

「おっ…お兄さまっ！」

顔を赤らめて、両手をバタバタと動かし、焦る自分を隠している

ローズ。

「ルイス殿には、当時、婚約者が居たんですよ。なんでも両家の両親が勝手に決めた……」

「ルイスは、お兄さまには勝手に決めたと言っていたけれど、婚約者の話をするとき本気だ、嬉しそうに話すの」

「そう……俺の記憶が正しければ、パリス……」

「男の子みたいな名前なのに女の子だと聞いて驚きましたわ」

あの当時、パリスとルイスが婚約していたと……

だから……あの時……スノーピークにジオールさえ来なければ、僕達の世界は二人だけで進んでいただろうに……」だったのか。

「私は、去り際のルイスに問い詰めたわ。パリスは一体どんな女性なのか……私は見たこともない同性を目標に、ルイスに認めて貰えるように努力したわ」

キュッとドレスの裾を掴み鼻をすすりだした。

「でも……ルイスはやっぱり私ではダメだと……きっぱりはつきり態度で断られてしまいました。つい先日のお事でしてよ？」

そう……ウィークスピークで運命的な再会を果たしたのだ。

「まもなくスノーピーク行き出航いたします。乗船手続きがお済みでないお客様は、お急ぎくださいませ」

未だに城下を歩いていたルイスは、流れたアナウンスに慌てて走った。

人々が行き交う城下街では、急ぐルイスと肩がぶつかり合っ
てしまふ。

そんな時、突然道が開けた。

「えっ……」

ルイスは、顔をしかめて開けた先を見つめると、衛兵に囲まれて
歩みをすすめて来る一人の女性が居た。

薄いベールを頭に被り、俯く女性。

ルイスは道の真ん中に立っている事に気がついて、端に寄ろうと
思った時だった。

「……ルイス?!」

ベールで顔を隠す女性に名前を呼ばれ、ルイスは固まった。

えっ?と呼ばれた方を見ると、ドレスの両裾を持ち上げて走って
来てルイスの前で立ち止まった。

「ルイス……ああ……なんて素敵なの」

「……ええっと……」

ポリポリと頬を掻いて、視線を逸らすルイス。

「……ルイス……まさか私を覚えていなくて? 私は、片時もあなたを忘
れた事などなかったのに!」

ローズは、ベールを投げ捨てて真っ直ぐにルイスの顔を見つめた。

「……あ、えっと……ローズ姫?」

曖昧にしか覚えていないのか、自信なさげに言った。

「……酷いルイス! 直ぐに言ってくれないだなんて! どうせあなたの
頭の中は、パリスの事で一杯だったのね?」

そう言われて、はいそうです。とも言えずに無反応をしているル
イスに、目の前の美姫はイライラし出したのがわかった。

「……いいわルイス、私ここにパリスが居るの知っているのよ」

「うん。ダッブーペンギンの世話で滞在していますよ」

「そう…ルイスが私に振り向いてくれない限りパリスに嫌がらせしてやるわ」

「嫌がらせ？」

首を傾げていると、再びアナウンスが流れた。

ルイスが船に乗る事は、事前に伝えてあった為に、中々乗船手続きにこないルイスに対して流れたようだ。

それに気づいたルイスは、ローズが何か言うのを遮って慌てて港へ走って行った。

後ろからローズの叫ぶ声が聞こえたが、あまりにも離れ過ぎた為に何を言っているのか聞き取れなかった。

ローズ姫は、パリスに嫌がらせをする。と息巻いていたが、実際彼女に危害が加わるような事になったらジオールが放っておかないだろう。

それ以前に根は優しいローズ姫が、嫌がらせなどという低能な事をする筈がない。

今は、まだ心の中で整理がついていない。

パリスにふられた事。

家の事。

准将の事。

港へたどり着いたルイスは、息を乱すことなく手続きを素早く済ませて船に乗り込んだ。

「何も起こらないとは限らないし…」

案内された船室に荷物を置いて、紙に書き出した。

「親愛なるパリスへ…」

「叫んだのです。あなたが好きですと…一度は、振り返ってくださいました…けれど、そのまま走って行って」

嗚咽を漏らして、高級素材のドレスの袖で涙を拭うローズ。

慰めるようにラクティスは、ローズの背中をさすった。

「きつぱりはつきり断られたかどうか判断するには不十分じゃないか？」

ジオールは、黙ってローズの話を聞いて言い放った。

「いいえ。私はふられたのです。彼の心には未だにパリスが居るのです。嫌がらせをするだなんて言っただけはいいものの…」

そんな事、私に出来っこない。

王宮で侍女が、そんな目に遭っているのを目撃した事は、幾度となくあった。

その度に、何故そんな事をするのか理解できなくて腹ただしく止めには入っていた。けれど、私の見ていないところで繰り返して行われていたらしく、侍女は辞めていってしまった。

私は愚かにも、その立場になろうとしていた事に、情けなくなった

目が醒めても、頭はすつきりせずモヤモヤと浮かぶ光景。

昨晚、ジオールはローズ姫の客間に泊まったのだろうか。

あの逞しい腕の中で、ローズ姫は眠った？

ジオールの熱い唇を体中に這わせた？

そんな考えが駆け巡り、ベッドから飛び出してメイドの支度を始めた。

支度中も、ムカムカは募るばかりで捌け口がなくて悔しさに涙が

出てきそうになった。

こんな姿をジオールに見られなくて良かった。と安堵していたら、タイミング悪くジオールが部屋に入って来た。

「?! パリス、どうした!」

駆け寄って来た、ジオールに体をビクリと跳ね上がらせて見上げた。

目尻から零れた一筋の涙に気づいたジオールは、そっと指で拭きうとした。

ジオールの指先が、頬に触れるか触れないかの距離。

パリスは、咄嗟にその手を叩いた。

乾いた音が、早朝の静けさに響いた。

驚きを隠せないのは手を叩かれたジオール。

「…いた…欲しく…ない」

ぼそぼそと呟くパリスにジオールは怪訝に顔を歪めた。

「他の女の人を抱いた手で触って欲しくない」

パリスは、そう言うジオールの脇をすり抜けて部屋から出て行った。

「パリス、遅刻は減給よ! 次からは気をつけなさいな」

メイドの毎朝ある朝礼にギリギリ間に合ったパリスは、息を整えてマギー侍女長の前に並んだ。

「さて、今日の采配は…客間のベッドメイクをジェシカとマリアンヌに任せるわ。滞在中のローズ姫に失礼のないようにね。パリスはいつも通り陛下の私室とダッブーペンギンの世話。他は、いつもの食堂、陛下の各使用場所の清掃。以上」

わかってた。わかってたわよ。私が陛下の専属メイドだってことくらい。

専属なんて嫌だと思ったのは、これが初めてかもしれない。

「パリス、顔色悪いわよ？」

「えっ？そっ…そうかな？」

ははつと無理に笑って、その場をしのいだが虚しさだけが残ってしまった。

あんな風にパリスから拒絶された事なんてなかった。

叩かれた手よりも、心がグサリと刺されたような感覚で言いようのない痛みを感じた。

他の女の人を抱いた手で…か？

そんなことあるわけないのに、何故パリスは口走ったのかが理解出来なかった。

「何をされているのです？」

背後から声をかけられて、振り向くとローズ姫がパリスの部屋の入口に立っていた。

「…パリスに会いに来たんだが…」

「いませわよ？」

キヨロキヨロとわざとらしく周囲を見渡してみせるローズを横目に部屋から出た。

後ろにはローズ姫がついてくる。

「……姫、何か？」

「ジオール陛下はパリスと会うんですの？」

「…ああ。何やら色々勘違いしているらしいからな」

重い溜め息を零したジオールを見てローズ姫は、くすりと微笑んでみせた。

「このローズでよければ、お話を聞かせてくださいな」

小首を傾げて、大きな瞳を一瞬細めてジオールに言った。

ジオールは、どうしてこの時、ローズ姫に言われた通り、パリスと一悶着があったかを説明してしまったのだろつかと、後々後悔する事になった。

「きつと、それは私に嫉妬しているのではないかしら？これはとっておきのチャンスだと思いませんか？」

昼前の穏やかな天候の下、中庭にある東屋で腰を下ろして二人はパリスのことで話合っていた。

「チャンスだと？」

「ええ二人が、本当に愛し合っているのかどうか」

ローズは、一際ジオールの側まで近寄ると、高価な素材で作られたスラックスの太ももに、自分の手を置いて顔を近づけていく。

「……やめ「ダップー」！」

やめないか。と言う前に、可愛い可愛いダップーペンギンの鳴き声がすぐ近くで聞こえて、声のする方を見た。

東屋の柱と柱の間に立つ、パリス。

腕には、暴れるダップーペンギン。

「パリスっ……違う！」

パリスに届いたかわからないが風によって掻き消され、ジオールは咄嗟に走り去って行く彼女を追いかけた。

「はあはあ」

口元に手をあてて、息を殺して建物と建物の隙間に身を隠したパリスは、ジオールが通り過ぎるのを待った。

あのまま、ダブプーペンギンが鳴かなかつたら、二人はキスをしていた？

お昼前のダブプーペンギンの散歩に出てみたら、東屋に入って行く二人。

遠くからみても、凄くお似合いな二人。溢れだしそうな涙をグツと飲み込んで今し方、通り過ぎて行つたジオールを見て、パリスは頷いた。

ダブプーペンギンの世話係兼ジオールのメイドとしてウィークスピークにやって来た。

いくら、私が貴族でもジオールとは不釣り合いな身分。

ジオールとは、恋人で居れても夫婦にはなれない。

ルイスのように王族と深い繋がりのある侯爵家の一員だったら希望は持てたかもしれない。

いつか、ジオールは私じゃない誰かと結婚して、その子供がウィークスピークを動かしていく。

別れは早くに切り出した方がいいのかもしれない。だって、あまりにもジオールを愛し過ぎてしまったから。

あまりにも苦しい。パリスは、壁に手をあててふらつきながら、隙間から出た。

実家に帰ろう。

城のみんなに何も言わずに出て行くのは、申し訳ないが上手い理由が見つからない。

パリスは、久しぶりの城下街へと続く門へと向かった。

物凄い剣幕で、ジオールは自室で落ち着きなく動きまわっていた。

普段めつたに、パリス以外の人間を入らせないが、今はそれどころではない。

パリス搜索の騎士団を作り召集させたのだ。ガタイの良い騎士達でむさ苦しいことこの上ないが、ジオール自身が信賴を置いている者達なので直ぐにパリスの行方はわかるだろうと思っていた。

どこに行ってしまったんだ。

まさか城の外？

徹底的に城内の搜索をしたがみつからなかった。そうとなると範囲が広くなり搜索が難しくなる。

無意識に舌打ちをした時、一人の騎士が慌ただしく入って来た。

「陛下。パリス殿の行方が知れました！」

「……どこだ?!」

入って来た騎士に注目が集まり、ずかずかと大きな歩幅でジオールは近づいて行く。

「城下街の港でございます」

一方、パリスは港まで着いていた。

もうすぐ側にまで近いて来ている船に乗る為の乗船手続きをするために。

「スノーピークまでお願いします」

不審な顔で見つめる手続員。無理もないだろう。

瞳を紅く晴らして、城の制服を身に纏った女性が乗船手続きに来ているのだから。

手続員は何か訳ありと判断し、パリスに気づかれないように城へ電報を打った。

船が港に入港し、そろそろと観光客が歩いて来る。

パリスは、何だか早く船に乗った方がいいような錯覚にとらわれて、急ぎ足で船へと向かった。

行き違う人と肩をぶつかり合わせながら、向かっているとグイッと腕を掴まれた。

「！！！」

パリスは、目を見開き掴まれた腕を見た。

「……ルイス……」

「ローズ姫が滞在してるからね。慌てて家の用事を済ませて来たよ」
そう言うルイスは、まじまじとパリスの様子を見て苦虫を潰したような表情になった。

「ルイス……私……っ！」

徐々に潤んでいく瞳に、ルイスは震えるパリスの体を抱き締めた。ちょうどその時、電報を受けた一行が坂を下り、こちらに向かって走っていた。

その中に、勿論ジオールもいて。

距離的に遠いが、お互いの表情が険しくなったのがわかった。

観光客は、武装した騎士の集団と一際目立つジオールを見て、ざわざわと騒がしくなった。

「ワイマール、港から人を出して封鎖しろ」

ジオールは、ウィークス・ピーク国王の威厳に満ちた声で騎士団の隊長に命じた。

踵を返して騎士達は、観光客や野次馬達を港の入口まで誘導し始めた。

「邪魔はなくなった。パリスを返してもらおう」

「こんな状態のパリスをジオールの元に行かせるわけにはいかない」

「……パリス、城に戻ろう」

先程より幾分、優しい声音でパリスに、そう呼びかけるが当のパリスは、ルイスの背後で身を隠したままで反応を示さなかった。

「パリスは戻りたくないと言っている」

「ルイスに聞いていない」

ジオールは焦った声でルイスを睨みつけた。

「ジオール…陛下。…私、貴方との未来が見えない」

いまだにルイスの背後で身を隠してジオールに姿を見せないパリスは、そう言葉を発した。

「パリス、もう船に乗りなさい」

ルイスが首だけを動かして言うと、コクリと頷いて船に向かって歩みを進めた。

「パリス！」

ジオールは顔色を変えて、走って来る。

ルイスは、それを見て腰に携えていた長い剣を鞘から抜いて構えた。

「?!」

「ただちに、港の封鎖を解除していただきます」

「ルイス…准将！！反逆するつもりか?!」

「知らなかったのですか？パリスを迎える為に准将なんて階級、棄てました」

「なんだと?!」

「ジオール…今はパリスに時間をもらえないだろうか」

構えていた剣を下ろして、穏やかな表情でルイスはジオールに説得する。

「ジオールも、もう良い歳なんですし…この意味、わかりますよね？」

「…条件がある。ルイスは、ここに残れ」

「ええ。そのつもりです。准将剥離の手続きにきましたからね」

あまり納得のいつてなさそうなジオールを横目に、封鎖している騎士の元へ向かう。

スノーピークへ向かう乗船客があるはずだからだ。
騒ぎが収束したのは、既に陽も落ちた頃。

パリスを乗せた船は、スノーピークへ向かって静かに出航した。
謁見の間で、改めて対峙したジオールとルイス。と、何故かローズ姫。

先程から、ルイスの背中にへばりついて、それはもう背後霊のようだ。

「私は、ずっとずっとずっとお会いしたかったです。ちゃんとお話をしたかったです」

「ローズ、離れてくれるかな？いい加減、鬱陶しいよ」
にこやかに、さらりと厳しい一言を突きつけた。

特に効いている風もなく、ゆるい返事を残してルイスの背中から身を離れた。

「…そう言えば…パリスは、どうなったのですか？何だか私のせいで、険悪化させてしまってます」

「険悪化？」

ルイスが眉を寄せて、ローズを睨んだ。

「…私…陛下とパリスが、あまりにも仲が良いのが羨ましくて、わざと嫉妬させるように陛下に提案したのです」

「はあ…ローズ…それは大人の駆け引きだ」

深い溜め息と共に、非難の視線を投げられて、ローズは自分ごとんでもない事をやらかしてしまった事を後悔した。

「時間と距離をあけてみる」

そもそもローズの提案に乗ってしまった自分にも責任がある。
力なくジオールは呟いた。

陛下と私の嫉妬：終

陛下と私の未来

あれから、あの出来事があつてから一年が過ぎた。

時間と距離を置くなんて、強がつて言ったものの三日も保たず足は港に向かつていた。

でも、どこからともなくやって来たルイスに見つかり、城に戻された。

せめて、手紙だけでも。と自分の主張を訴えたが、それも聞き入れてくれなかった。

そんな中、城の重鎮達が結婚をすすめて来たのだ。

「俺は、パリス以外と結婚する気などさらさない。パリスを手に入れられないのなら一生独り身でも構わない」

苛々と頭を掻きむしりながら、准将の引き継ぎを行っていた。

その様子を聞いているたルイスがジオールの方を向いた。

重鎮達がジオールの周囲に立っている。それを見て、ルイスは二ヤリとほくそ笑んだ。

「なんでも、社交界に突然姿を現した美女だそうですぞ」

「詳しく話をしたら、愛嬌のある娘で貴族らしくないところが、王侯貴族の紳士の心を掴んでいるそうです」

「この一年間で求婚された数は四百とも五百とも言われています」

「有名な吟遊詩人にモデルにされるぐらいだぞ」

「では、その有名な詩人の唄を聞かせてくれないか」

ジオールは机の上で肩肘を置いて、社交界に現れた美女を熱く語る重鎮達を白い目で見て言った。

「いや、それはだね」

「えつと何だった？」

互いに顔を見合わせて、嫌な汗を流している。

「結局、噂だろう？一介にもこの国の重役を担っているお前たちが、

何を浮き足立っている」

冷めた言葉を連ねて、騒いでいた自分より一回り以上の重鎮達を黙らせたジオール。

「とにかくこれ以上、結婚話は持つてくるな」

ピシヤリと言つてのけて居心地が悪くなつたのだろうか、ジオールは部屋から退出して行つた。

「うゝむ…」

「失敗でしたね、叔父上」

ふうと一息ついてから、ルイスは重鎮達の一人、シュテルスに声をかけた。

「なかなか手強いのー」

「いつそのこと…社交界の場所、城で催してはどうですか？」

ルイスの代わりに選抜された准将候補に冊子を渡して部屋から出すと、残つた重鎮達を見回して提案してみた。

「ふむ。良い案だな」

「よし。やってみよう」

各々が勝手に納得して、ジオールの知らないところで着々と城内パーティー（陛下の後選び）の案が進められていった。

この一年で陛下は、確実に短気になった。

それは誰が言い出したのか。

けれど、それは決して間違つてなどいなかった。

「——と言っわけです、明日生誕祭ですてパーティーを開催させます」

「は？」

いきなり執務室に現れたシュテルスは、豆鉄砲を食らったような表情をしたジオールを見て、笑いをこらえるのに必死になった。

「ガラルド公爵家の秘蔵っ子の誕生日なのですが、盛大にしたいと申しておりますね」

「ガラルド？」

ギギッーと鈍い音がして、そちらに意識をやるとルイスが立っていた。

「陛下が幼少期、世話になったあのガラルド公爵ですよ」

「ああ…まだ生きてたのかルイスのお祖父様とやらだな」

「まあ、相変わらず元気にやってるよ。秘蔵っ子は、お祖父様のお気に入りだからね、ぜひウィークスピーク城の大ホールで開催したいそうだ」

「決まった事なのだろう？もう勝手にやってくれ」

ジオールは、もうどうでも良い。とぶらぶら手を振り、執務室から出て行くように促した。

ルイスとシュテルスは顔を見合わせて、そそくさと部屋から出て行った。

「うまく行きましたね叔父上」

「こんなにあっけなく了承してくれるとはな」

顎に生えた無精髭を撫でながら、微笑んだ。

「部下は、こんなにも頑張ってるのになー」

「陛下の喜ぶ顔を見れるのなら、何でもしますぞ」

この一年、パリスは俺のことを少しは気にしてくれているのだろうか。

いや、パリスは俺とローズ姫が結婚するものだとか勘違いしたままだったな。

それでも、手紙の一つや二つ送って来てはくれないのだろうか。

ダッブーペンギンも、最近ますます元気がなくなってきた。寿命は長いと、聞いていたから歳ではない事は確かだ。

毎日毎日、一人になるとパリスかダッブーペンギンの事で頭がいっぱいになる。

「はあ……」

その日の夜、明け方までジオールの執務室の灯りは消えることがなかった。

朝になり、パタパタと廊下を走り回っている足音に目が覚めた。

つい先程、自室に戻りベッドに潜り込んだばかりなので、眼球の奥がズシツと痛んだ。

やけに騒がしい。

ああ……そうか。

ガラルド公爵の秘蔵っ子の生誕祭だったな。

秘蔵っ子って……男？女？スノーピークに行ったあの時、同年代の子供はパリスにルイス、そして俺だけだった。

妙に、興味が湧いた。

もしかしたら、俺がウィークスピークに帰った後にガラルド公爵家に来た。とかか？

ジオールは、寝間着を脱ぎ捨てて何故か片隅に用意されている正装を身に纏った。

自室の窓から、外の様子を眺めると貴族の紋章を施した馬車が次

々に城内に入って来る。

「本当に盛大だな」

大きな欠伸を隠すことなく部屋から出た。

目に前には慌しく走り回るメイド達がいた。

以前パリスが喜んで着ていた給仕係の制服を翻しながら走っている。

「あら陛下！陛下も参加するのですね」

「あ？ああ…顔だけでも出そうかと」

「たつくさんの貴族に圧倒されますよー」

「はは…倒れないように気をつける」

なるべく顔を引きつらないように微笑んでみせたが、本当に自分はパリスが居ないと自然に笑えないんだな。とぼやいた。

大ホールに近づくにつれて談笑と熱気、そしてクラシカルな音楽が流れていた。

一歩ずつ足を踏み出してホール内に入ると、一気にざわめきがホール全体に伝わったのがわかった。

色めき立った貴族の娘達は思わぬジオールの登場に、瞳を輝かせて一斉に集まって来た。

「ちょっと、…離れてくれないか」

穏やかな表情とは裏腹に、芽生える苛立ちを必死に胸の奥に留まらせた。

「いえ…はい…でも」

——！！

ジオールは今、耳に入ってきた声に一瞬固まり、それから周囲を

見回した。

まさか、そんなはず。

この喧騒の中、自分の耳を疑った。

でも何故。

このパーティーに?!

「あの、ですから以前にも」

その声だけが、その息づかいだけが鮮明に耳に入ってくる。

どこに、どこに居るんだ。

人並みを掻き分けて、無我夢中になって探す。

紅と白を基調としたドレス。華やかさは皆無だが、金とも茶色とも言えない不思議な色合いの結った髪が存在感を出していた。

「パリス!!!」

間違っていないはず。いや、あれは間違いなくパリスだ。

大股に彼女に近づき、隣にならぶ貴族の青年を横目に見ながら、腰を抱きしめて引き寄せた。

パリスはグイッと腰を抱きしめられて視界が後方に倒れて行くが、懐かしい声と薫りに不安はなかった。

ちゃんと受けとめてくれるとわかっていたから。

「ああ、パリス!」

首にかかる熱い吐息に、一年前までの彼との営みが思い出された。

「なぜ、このパーティーに?」

向きを変えて、ジオールと対面した。もう周囲がざわめいていようが、そんな事はどうでも良かった。

「今日は、私が主役なの」

メイドをしていた時よりも随分綺麗になったパリス。手も荒れていなければ、化粧も施されている。

「主役?」

「私：ガラルド公爵家の養子になったの。ジオールと、結婚するために」

少しやつれたジオールの頬を撫でながら、金の髪に触れる。

「ルイスに毎日手紙をもらっていたの。ジオールの様子を書いたものなんだけどね。私以外の人とは絶対に結婚しないって、するくら

いなら一生独身で居るって聞いて…」

ポロポロと、大きな瞳から大粒の涙が溢れ出した。

「そのお陰でますます、お妃教育に熱が入ったよ」

「ああ」

ジオールは、震える指先でパリスの涙を拭った。

「私…勘違いしてばかりで…」

「昔の事だ。でも…俺は、昔のパリスが好きだ。堅苦しいお妃教育なんてものは必要ない」

「私もね。そう思ったの…だから…」

につこり微笑み給仕のメイド達に視線をと合図を送ると足早にやって来て、みんなの目の前でドレスに手をかけた。

「なっ！やめないか」

ジオールが静止するように指示するが一向にやめない給仕係。しかし、全てのドレスを脱ぎ捨てたパリスの格好は…
目を見開いたジオールは、破顔して言った。

「おかえり、パリス」

パリスは、一年前まで毎日着ていたメイド服を身につけて、両手を広げたジオールの胸の中に飛び込んだ。

「結婚して欲しいパリス。爵位なんて関係ない」

「勿論！！」

パリスとジオールは互いにに微笑み合い、それから相手を確認めるようにマジマジと見つめ合うと、惹きつけられるように唇を重ね合わせた。

その瞬間

盛大な音楽と、割れんばかりの拍手がホール内に響き渡った。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9071m/>

陛下とメイド

2010年10月12日21時47分発行